
ONE PIECE 最強の転生者

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 最強の転生者

【Nコード】

N0864Z

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公は、三つの漫画の力を授かりONE PIECEの世界に転生させられてしまった。とりあえず主人公がすることは・・・？

プロローグ

「初めまして」

俺は誰かに声をかけられた。

ここはどこなんだろう．．．もしかして夢？

辺りは真っ暗で何も見えない。

そう思った瞬間、俺の前に光とともにやってきた女性。

「初めまして、私は全ての世界を統括する神です」

はあ？

なんか突然やってきた女が変なことを言い出したぞ？

俺は何がなんだかわからない状況に混乱している。

しかし、そんなこともお構いなしにその女が話始めた。

「あなたは死にました」

はあ？

本日二度目の混乱。

「あなたの人生はこれからでした。しかし私のミスであなたは死ぬことに・・・」

じゃーお前のせいじゃねーか！

夢だからなのかうまく声が出せない。

「お詫びとしてあなたをほかの世界に転生させます」

いやいや、勝手に決めるなよ神様。

「そうですねえどこが良いですか？」

どこがって・・・どんな世界があるかもわかんないのに良いも悪いもあるかよ。

「あなた・・・無口ですか？」

何も言わない俺に対して神様はそんなことを聞いてくる。
だから喋れないんだって！

「むうゝ仕方ないです。ではルーレットで決めさせてもらいますね
！」

勝手に決めるなよ！

てか、もうなんかルーレットみたいなもの回ってるし……。

ぐるぐるぐるゝ

てが多いな！

何だそのルーレット！

俺の目の前には1000以上の項目が書かれたルーレット。
俺って昔から動体視力だけは良いんだよなあ。

バンッ！

急に止まるルーレット。

そして、そこに書かれていたのは『ONE PIECE』。

え？ONE PIECEって・・・ワンピース？わんぴーす？
あの漫画の????

「ではONE PIECEの世界に転生させますね」

また勝手に言ってやがる。無理に決まってるだろ・・・てか死ん
じゃうって・・・。

「あ、今のままじゃまたすぐに死んじゃいますね」

おお？

もしかして俺の心が通じたのかい？

少し嬉しい俺。

「では3つの力を授けます」

神様がそう言っと、また回りだすルーレット。

いや、それもルーレットで決めるのかよ！

「決まりました。

一つ目は漫画『めだかボックス』のキャラクターである球磨川 楔
マイナス
の過負荷の力【大嘘憑き】
オルフィクシオン

。

二つ目は漫画『BLEACH』のキャラクターである朽木 白哉が持つ斬魄刀【千本桜】。

三つ目は漫画『Get Backers - 奪還屋 -』のキャラクターである美堂 蛮がもつ【邪眼】。

この三つです！それでは転生」

神がそう言つと俺は頭が痛くなり、気を失った。

くろせしんいち
黒瀬新一。 21歳。

身長172cm

体重55kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。

顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。

神様から与えられた能力は【大嘘憑き】^{オールフイクション}、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

オールフイクション
【大嘘憑き】

^{すべて なかったこと}現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかったこと」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる（因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることによって桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまったため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『くもんぼんぎょく』）」。卅解時にも唱えることがある。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。2
4時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限
が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁
を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。

プロローグ（後書き）

さてこれからどうなるのか・・・。
とりあえず好きなように書きたいと思います！

マジで転生しちゃったよ・・・

目が覚めるとそこはあたたかい布団の中だった。

やっぱり夢だったのか・・・？

新一がまだぼーっとする頭でそんなことを考えていると、急に現実
に引き戻された。

「目が覚めたようだね」

女の人の声。

新一は身体を起こし、その声の主を確認した。

「・・・・・・・・!!」

見たことがある姿。
あれは・・・・・・・・。

ノジコ？

なんと新一の目の前にいたのはONE　PIECEに登場するキャラクターのノジコだった。

やっぱり夢じゃない・・・？

それを確認するために、新一はノジコに話しかけてみる。

「ここは？」

「ん？ここはココヤシ村だよ」

やっぱりそうだ！

俺は本当にONE　PIECEの世界に転生してしまったのだ。

「何も覚えてないのかい？」

ノジコは俺を心配しているようだ。

俺はとにかく情報を得ようと「ああ」とだけ答えた。

「あんだ、この家の前に倒れてたんだよ？本当に何も覚えてないのかい？」

覚えていないわけじゃない。

むしろ頭も覚醒してすっかりしている。あの神様とかいうやつのもも……。

俺ははつきりと確信した。

本当にONE PIECEの世界に来たんだと……。

それがわかっただけでいい。

まずは、今が原作のどの辺りなのかをノジコに聞いてみよう。

「ノジコは一人暮らしなのか？」

とりあえず今の状況を知るのなら、この質問でいいだろう。

「あんたまさか……」

「？」

「変なこと考えてんじゃないでしょうね？」

なっ！！！！

質問を間違えたのか？勘違いされてしまった。

「あっはっはっは。冗談だよ！」

そういえばノジコってこんな感じだったっけ……。

「そっだねえ……。今はなかなか家に帰らない妹と二人暮らしかな」

妹……。。

ナミのことだ！

ってことはまだルフィはナミを仲間にしていない……。ってことでいいのか？

「そうなんだ。えっと……。俺、行かなきゃいけない所があるんだけど船とかあるかな？」

俺は確信を得るためにそう言う。

「……………」。

あんたがどうやってこの島に来たのかはわかんないけど、今はこの島からは出られないと思ったほうがいいよ」

「どっして？」

「この島はアーロンって海賊に支配されちゃってるのさ。」

アーロンはこの島に来る者も出る者も許さない……。だからこの島に船はないし、出て行こうとする気でもすぐに見つかって殺される」

やっぱりまだアーロンがいるのか。

ノジコの見た目は原作通り……。ってことはまだルフィは東の海にイーストブルーいるってことか。

なら……。俺のすることは、せつかくONE PIECEの世界に
来たんだからルフィと旅でもするか！

やることも決まったし、ルフィを探しに行こう！

俺は短絡的にそう考えた。

「ノジコ、なんかお世話になったみたいで……。ありがとな」

「いや、それはいいけど……。まさかあんたこの島を出るつもりじゃないだろうね？」

ノジコの表情が変わる。

「いやいや、ちょっと散歩してくるだけだよ」

俺は適当にそんなことを言っただけで家を出た。

いやゝまさか本当に転生するとは……。

ん？

みかんの木の下に何か落ちてる。

俺は悪いと思ったが、みかんの木の下に手を入れてそれを手に取った。

「これは……」

そこに落ちていたのは刀だった。

「もしかして……千本桜？」

そういえばノジコは家の前に俺が倒れてたって言ってたな。
この世界に来た時にみかんの木の下に転がっちゃったのか？

しかも．．．。

なんのサプライズかは知らないけど、今の俺の格好は死覇装^{しはくしやう}．．．
つまりは黒い着物だ。

さすがに隊首羽織^{たいしゅおひ}は無かったが、まあこの服装のおかげで刀を腰に
携^もえることが出来た。

俺は今アールンパークに向かっている。

目的はもちろんアールンをぶっ飛ばしてこの島を出て行くためだ。

あと、この3つの力がどれぐらい使えるか．．．俺の強さも知りた
いしな。

普通は修行とかして強くなるんだろうけど、2年とかかかっちゃっ
たらルフィたちは魚人島に行ってしまうし．．．。

ぶっつけ本番が俺のモットーでもある！

もしこれで死ぬことになってもそれはそれだ。

どっちみち一回死んでるらしいし、ONE PIECEの世界で楽しむためには強さがある。

アーロンを倒せたらそこそこ強いだろ！

とりあえず今のゾロやサンジより強いってことになるしな。

そんなことを考えながら歩いているが、まったくアーロンパークにたどり着かない。

「・・・・・・・・」

どこにあるんだ？

たしかココヤシ村から近かったような・・・。

「あゝあ、空でも飛べる能力にしてほしかったよ」

すでにやる気をなくしてる主人公・・・。

「てかなんでココヤシ村からなんだよ！こつこついつのっていきなりル
フィ発見！とかなるんじゃないの？」

「あ」

そんなことを言っていたらアールンパークが見えてきた。

「やべえ．．．緊張してきた」

三つの力を貰い最強かと思われた主人公だったが、心は一般人な新
一だった。

「やっぱ死にたくねえー」

マジで転生しちゃったよ・・・（後書き）

結局新一はアールンと戦うんですかねえ？

実際に転生したら絶対戦わないと思います。
だってアールンとか恐すぎじゃん？笑

新一、初めての戦い

とうとう来てしまった。

新一は今、アーロンパークの入り口前に立っている。

「行くか・・・」

意を決してそう呟くと扉わゆっくり開く。

おじゃまします・・・。

心の中でそう言う。

口には出さないぜ？
だってかっこ悪いじゃん！

「ああん？」

扉を開けた先にはアーロンがこちらを睨んでいる。

恐ええええええええ

「なんだてめえは？」

さらに声を荒げて言うアーロン。

まあ、いきなり嫌いな人間がやってきたら機嫌も悪くなるだろう。

そう考えていると、モブキャラである魚人が新一に近付いてきた。
本来ならルフィたちに一瞬、一コマで瞬殺される程度の奴らだ。

でも実際見たらめっちゃ怖い！

しかしそんな思いを悟られてはならないと、俺は強気な態度を取る。

「お前らがこの島を支配してるアーロン一味か……悪いけどお前らを潰させてもらう」

言った――――！！

うつわ、凄い顔でアーロンに見られてる……。

でももう後には引けない。

俺はゆっくりと千本桜に手をかけて、そして刀を抜い・・・・・・・・・・
抜けねえ！！

あれ??

そういえば刀って素人が抜くのは難しいんだっけ？

やたら堅いんだけど・・・・。

やばい！このままじゃめっちゃかつこ悪いじゃん！

くっそゝこんなことなら来る前に練習しとくんだった・・・・。
ぶっつけ本番が仇になってしまったよ。

んゝもしかして角度とか関係あるのかな？

俺はアーロンたちにバレないようにそっと刀を引き抜こうとした。

カキン・・・。

お？

なんかわかんないけど抜けた！！

「そんな物騒なものを持って何するんだ？」

アーロン一味のモブキャラたちが新一に近付いてきた。

えっと・・・確か解号は・・・。

「散れ・・・千本桜」

新一がそう言うのと千本桜の刀身が消えた。

「・・・刀身が・・・消え・・・」

モブキャラやアーロンたちも驚いている。

その瞬間、モブキャラたちが千本桜によって斬り刻まれた。

うつ．．．。

予想以上にグロい．．．。

俺の周りではモブキャラたちが血塗れになって倒れていく。

てか勝手に斬り刻まれたけど．．．まあ、初めてだしコントロールできないのも当然か？

あ、ここはかっこつけるところじゃね？

「俺はアーロンに用があるんだよ。雑魚は引っ込んでな」

言ってやったぜ！

ってかめっちゃアーロンが睨んでる。

「てめえ．．．よくも同胞を．．．」

アーロンはそう言いながら座ってたイスから立ち上がった。

で、でけえー！！

俺の倍はあるんじゃないか？

そう思わせるほどアーロンの身長はでかい。

「アーロンさん・・・あんたは座っててくれ」

お、ハチ、チュウ、クロオビの三人の幹部が出てきた。

痛え・・・。

俺は三人の幹部に瞬殺された。

「シャーッハッハッハ。どうやら口だけの男だったようだな」

アーロンが笑っている。

「さてこの男どうするか・・・」

クロオビは腕を組みながら言う。

「・・・殺せ」

アーロンが不敵な笑みを浮かべながら新一を見ている。

「この下等種族は俺の同胞を亡き者にした。こいつは殺して、捨てとけ」

アーロンのその言葉を聞いたハチは倒れている俺に近付き「ニユ、何か言い残すことはあるか？」と聞いてきた。

俺は薄れゆく意識で「雑魚が・・・」とだけ言った。

雑魚はどう見ても俺の方なんだが、最後までかっこよくいたいと思ったために出た言葉だった。

ザクツ・・・

ハチは持っていた剣で新一の身体を突き刺した。

「シャーッハッハ、少しは気分もすっきりしたぜ。

だが、まだだ！このままココヤシ村にでも行って、あと2、3人ぶち殺してやるか・・・」

「チュ、それはいい考えだ」

そしてアールンたち4人はスタスタと歩きだした。

あれ？

生きてる・・・。

新一の意識が戻る。

そうか！大嘘憑オールライクシヨンきが発動したんだ！

なるほど、なんとなくだけど発動の仕方が理解できた。

右手には千本桜もある。

「散れ．．千本桜」

バシユウウウウウ！！

「！！！！？」

千本桜がハチ、チュウ、クロオビを斬り刻む。

そして俺はゆっくりと立ち上がる。

いきなり3人が血だらけになって倒れたので、アーロンは何が起きたのかわからない。

だが、後ろに感じた人の気配に驚愕した。

「どういうことだこりゃあ」

アーロンはキレた時の目で新一を見た。

めっちゃ怖いけど・・・やっぱりここは括弧つけるべきだろう？

『オールフイクション
大嘘憑き！』

『俺の絶命を・・・なかったことにした！』

マネさせてもらったよ球磨川。

でもここからは俺の戦いだ。アールンとの一騎打ち。

この戦いで力をコントロールしてみせる！

新一、初めての戦い（後書き）

いや、次はアールンとの戦いですが、どんな戦いになるのか。

ルフィたちはいつ登場するのか。

まったくわかりません！笑

長い目で見てください。。。。

隙だらけの戦い

【そういえば卍解ってどうやるんだ？

確か卍解取得には本体の具現化と屈服が必要だったはず・・・。

卍解とは・・・。

本体の具象化と屈服が必要。

斬魄刀解放の二段階目。始解同様に変形、特殊能力の付加などが伴うが、基本的に始解の能力・特性を強化したものである場合が多い。戦闘能力は一般的に始解の5倍から10倍と言われており、その強大さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とされている。

また、卍解修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく始解することも可能。卍解に至るのは才能のある者でも10年以上の鍛錬が必要とされ、卍解修得者は例外なく尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。

具象化とは、対話の際に死神が精神世界に赴くのではなく、斬魄刀の本体を死神のいる世界に呼び出す事。卍解に至るのが困難とされる理由は、具象化に至るのが困難なためである。具象化した斬魄刀の本体を倒す事を斬魄刀を屈服させると言い、これに成功して初めて卍解を修得できる。

千本桜・・・卍解形態。

せんぼんざくらかげよし
千本桜景厳

斬魄刀を地面に向けて落とすと同時に解放。落ちゆく斬魄刀は地面に吸い込まれるように沈み、直後、所持者の背後から大量の巨大な刀の刀身が生え、それが塵のように舞って散る。「目に見えないほど小さい千本の刃」が能力である千本桜の刃がさらに増え、総数・億を越すほどの膨大な刃を出現・操作する。

見えない刃で斬りつける本来の用途以外にも、刃を圧縮して殺傷力の高い剣を造り出したり、相手を無数の刃で球状に囲んで逃げ場を無くしたりと非常に応用が効く。

この千本桜も同じようにしなきゃダメなのか？

それだと才能ある者でも10年はかかるって言われてるんだから無理じゃね？

でも始解は解号を言っただけで発動させることが出来た。もしかしたら卅解も意外と簡単にできるんじゃないか？

新一は刀の切っ先を地面に向けて「卅解！」と言って千本桜を地面に落としてみた。

キンッ・・・。

新一が落とした千本桜は重力に逆らうことなく地面に落ちた。

「やっぱり無理かぁ・・・」

いや、もう一回やってみよう！

次はもっと集中して、よくわかんないけど力を入れる感じで・・・。

新一はぶつぶつと何か言いながら千本桜を拾い、何に集中しているのかわからないが、とにかく集中した。」

「どういことだこりゃあ」

アーロンはキレた時の目で新一を見た。

『オールフイクション
大嘘憑き!』

『俺の絶命を．．．なかつたことにした!』

同胞がやられてキレてしまったアーロン。

新一を睨みながら体に入力を入れる。

『シャーク
鯨．．．オン・ダーツ
ON・DARTS!』

アーロンはそう叫ぶと新一を目掛けて頭から突進してきた。

「はっや．．．!」

ザクッ!!

アーロンのノコギリのような鼻が新一の心臓を突き刺す。

鼻に突き刺さった新一を地面に叩きつけるが、新一は「オールマイクシヨン大嘘憑き」と言って立ち上がった。

新一はアーロンに対抗しようと千本桜を解号させようとするが、アーロンのシャーク・オン・ターゲット鯨・ON・DARTSが速すぎて反撃できないでいた。

アーロンも千本桜の力を見ているので警戒しているのだろう。攻撃の手を休めずに新一を即座に、何度も殺していく。

しかし、何度殺しても立ち上がる新一にアーロンは苛立ちを隠せない。

しかし同時に、新一がなんらかの理由で死なないことを確信するアーロン。グランドライン偉大なる航路出身の彼は新一が“悪魔の実”の能力者であると推測した。

不死身・・・そんな能力があるのかと疑問も感じたが、実際に死なない新一を前にしてそんな疑問は無意味だと悟った。

「死なないということはわかった・・・だがこの俺が下等種族である人間に負けるわけがない」

アーロンはそう言つと新一を掴んで持ち上げた。

それと同時に新一が持っている千本桜を奪い、海に沈めた。

「死なないというのならこのまま殺さずに生かしてやる！」

新一がアーロンの言葉を聞いたのはここまでだった。アーロンが新一の首に手刀を入れて気絶させたのだ。

【よし！正解は出来た。

あとは白帝剣はくていけんにしてみよう。

新一は正解が出来た喜びからなのか、軽い感じでやろうとしていた。

終景・白帝剣しゅうけい・はくていけん。

千本桜景巖の全ての刃を押し固め、一振りの究極の剣にした形態である。

「終景・・・白帝剣！」

シューウウウウウ・・・」

アーロンが新一を持ち上げてしばらく経った。

（どうやら復活しねえようだな）

新一が復活しないことを確認するとアーロンの口角が上がる。

「シャーツハツハツハ、これで安心だな。このままどこかの土にでも深く埋めれば復活してもまたすぐに死ぬだろう」

どうやら無限に繰り返す死を考えているようだ。

確かに大嘘憑オルフィクシオンきでもこれなら復活できないだろう。

まあ、土をなかったことにすれば助かるかもしれないが、さすがにそれは新一には出来ないだろう。

アーロンは新一をとりあえず地面に叩きつけ、指定の椅子であらう場所に座る。

「シャーッハッハッハ」

「・・・一分」

パキ・・・

パキパキパキ・・・

パリーン！！

ザクッ・・・。

「・・・！！？」

今までアールロンがいた世界がまるでガラスのように碎け散り、白帝

剣でアーロンの腹部を刺している新一がアーロンの目に映った。

「お前が今まで見ていたのは幻だ．．．。残念だったな、アーロン
！」

俺はまんまとアーロンを出し抜いたことでテンションが上がり、クールなキャラを演じていた。

ふっふっふ．．．決まった。

「ふっ．．．下等種族が．．．一体いつから．．．」

アーロンは口から血を吐きながらも聞いてきた。

「お前がキレて俺を見た時さ．．．」

俺のその言葉を聞いてアーロンは倒れた。

隙だらけの戦い（後書き）

なんかアーロンのキャラが崩壊しすぎ？でしたね・・・泣

説明も多くてすみません。でもお気に入り登録が多くて作者は嬉しいのです！笑

テンションだけで書いてる感じもありますが・・・こんな作者でもよろしくです！！

新たな力

勝った・・・？？

アーンに・・・

「勝ったんだーーーーー！！」

俺は嬉しすぎて思わず叫んでしまった。

これで俺もONE PIECEの世界の住人としてやっていけると
思った。

そんなに甘くはないのにね？

ドゥルルン！

「？」

突然目の前が真っ暗になった。

え？

なにになに？？

「この世界を大いに楽しんでいるようだね」

新一の目の前に現れたのは、この世界に転生させてくれて三つの力までくれた神様だった。

「え？な、何？」

いきなりのことで動揺する新一。

「やあやあ新一くん。実は君に言い忘れたことがあってね・・・」

言い忘れたこと？

「何ですか？」

俺は恐る恐る神様に聞いてみる。

「実は君がこの世界で原作キャラを倒すたびに新しい力をあげる！
・・・っということを言い忘れたんだよ」

．．．新しい力？

おおおおおおお！！

めっちゃラッキーじゃん！

ってことは俺はもっと強くなれるってこと？

「じゃ、じゃ、そうですねえ．．．」

俺はどんな力にするのか悩んでいる。

「あ、ちょっと待って！」

「？」

神様は考えている俺の横に巨大なルーレットを出した。

「え．．．まさか．．．」

「そう！最初がルーレットだったんだからこれからもうそうしようと思ってる」

．．やっぱり？

人生はそんなに甘くないと思った新一。

がっかりとしている新一を無視するかのようにルーレットが回りだす。

くっそー！！

これじゃーまたどんな力を貰えるのかわかんないじゃん！

最初に貰った力は俺も原作読んでたからなんとか使えたけど．．．

．全然知らない漫画とかになったらどーすんだよ。

俺はぶつぶつと文句を言いながらもルーレットが止まるのを待った。力が貰えるのは素直に嬉しいしね。

ダンッ

どうやらルーレットが止まったようだ。

「決まったね！では四つ目の力は・・・」

今さらだが俺にはルーレットで何が出たのかはわからない。
というのも書いてる字が読めないのだ。

いや！

決して俺が日本語が読めないほどの学力ではないぞ？

字が日本語ではないのだ。

「四つ目の力はゲーム『ポケットモンスター』の技から・・・」

え？

ポケットモンスター？？

って・・・ポケモン！？

もう嫌な予感しかないよ・・・。

「【はねる】に決定しました!!」

ギャヤヤヤ——!!

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。

せめて……

せめて…………ほえるでしょーーーーがぁーーーー!!

「じゃあ、帰るね!」

そう言つて神様はどこかに消え、新一は涙目でアールンパークを見つめていた。

トントン…………。

トントントン…………。

「…………とりあえずココヤシ村に帰ろう」

新一は何回かはねた後、ココヤシ村に向けて歩きだした。
その道中で千本桜を鞘から抜く練習をしようと決意したのは言うまでもない。

新一がアールンパークの入り口に差し掛かった時、誰かの叫ぶ声が

した。

「おーーーーい、お前！どけよ！」

ん？

子どもの・・・声？

「俺はアーロンを殺しに来たんだ！」

「俺の父ちゃんはアーロンに殺されたんだ！どかないとお前だつて殺すぞ！？」

俺は入り口の扉から外の様子を見てみた。

ああ。

そういえばあんな子どももいたなあ。

俺が見たのは黄緑色のニット帽にオレンジ色のＴシャツ。そのＴシャツには『今』と書かれている。

あれは．．．ナミ！

その少年の目の前にはバックを肩に担いだナミが立っていた。
少年は剣を両手で持っており、涙を流し、震えながらナミに向かって叫んでいる。

え．．．と、ここにナミがいるってことはもうルフィはこの島に向かっている？？

しかもウソップやゾロは島に着きそうなんじゃないか？

俺はそんなことを考えながらも今後の展開を必死に思い出した。

（原作通りなら！）

その子どもにイラッとしたのか、ナミは胸元から組み立て式の木の棒を取り出してその子どもを殴ろうとする。

パシ．．。

「やめなよ」

なんとか振り上げられた木の棒を掴むことに成功した。

てかめっちゃ痛え．．。やっぱりナミは力があるなあ．．。

殴られずにすんだ子どもは目を見開いて俺を見ている。

「あんた．．．誰？」

ナミが俺の方に振り向いて言う。俺は木の棒を離してナミと向き合った。

「魚人たちなら俺が壊滅させたよ」

いきなりの俺の言葉にナミは動揺しているようだ。

「はあ！？」

やはり信じられないのだろう。
まあ、当たり前か．．．。

「信じられない？」

「あ、当たり前よっ！！」

だろうね。だけど．．．

「ならこの扉を開けて見てみなよ？」

「・・・・・・・・」

ナミは何故かそこから動かない。

先に動いたのは少年だった。

少年は泣いていた顔もすっかり晴れ、扉に向かって走って行った。
パンツと開かれた扉を少年とナミは無表情で見ている。

二人の目に飛び込んできたものは血だらけになり、倒れている魚人の数々。

その中にはアロンもいた。

「うそ・・・・・・・・」

ナミはその光景を見てうつすらと目に涙を浮かべている。

少年は俺たちの方に振り返り、笑顔で言葉にならない声を出していた。

先ほどまでまるで怒った顔をしていたナミがまだ信じられないという言葉を発しながら顔に手を当てて泣いている。

今思ったけど・・・・・・・・

実物のナミめっちゃかわいいじゃん!!

俺はその場に不相应な思いを押し殺して……ないけど、なんとか堪えてナミに話しかけた。

「泣いてるところ悪いけど、あんたにいくつかの願いがあるんだ」

「え？」

あ、今思い出した……あの少年の名前……チャボだ!!

新たな力（後書き）

最後はどうでもいいですよねぇ。笑
でもなんとなく入れたかった！

いやぁ〜やっとな？原作に介入出来そうです。。。

まあ、結構早めでしたね。。。。

次はルフィ出せるかなあ？

それは、次章のお楽しみで！！

ナミへのお願い

「俺、みんなに伝えてくるよ!」

そう言つて少年・・・チャボは走つて行つてしまった。

チャボを笑顔で送り出した俺にナミは話を戻すように言つ。

「本当にアーロンたちをあんたが一人で?」

まだ信じてなかったのか・・・。

「ああ、そうだよ」

「そつか・・・・・・・・・・ありがとう」

最後のお礼の言葉は小さく言つてたけど聞こえていたぜ。

俺はそんなナミに微笑む。

ナミはそんな俺を見て「な、何よ?」と強めに言っていたが、怒っていないことはすぐにわかった。

「それで．．私に頼みって？」

ああ、そうだった。

俺はナミにいくつかの頼みがあると言ったんだ。

「まず一つ目は、海軍を呼んでくれないか？」

俺はこの世界に来たばかりで海軍への連絡方法もわからないし、アーロンたちをこのまま放置しておくわけにもいかないだろう。

「もちろんあんたがアーロン一味ってのは黙ってるからさ」

俺はそう付け足すと、ナミは「わかった」とだけ言った。

とりあえず俺の頼みとやらを全部聞きたいのだろう。

しかしその時、4人の男が現れた。

「??」

「．．．」

俺たち2人の前に現れたのはあの海軍大佐のネズミだった。

こいつかあゝちょうど良かった！

「チチチチ．．．．今日は何というラッキーデー。戦いの一部始

終を見させてもらった」

え？

こいつ見てたの？

あ、そうか．．．原作ではアールンに金貰いにきてたんだっけ。その後でナミの家に押しかけるんだっただか？

「まぐれとはいえ、貴様のような名も無い奴に魚人どもがよもや負けようなどとは思わなかった」

うん、大正解！

完全にまぐれでした。

「だが、おかげでこのアールンパークに蓄えられた金品は全て私の物だあ！

貴様の手柄、この海軍第16支部大佐ネズミが貰った！」

うわぁ〜なんか凄い興奮して喋ってるよコイツ．．．。

「ナミ。一つ目を取り消して、コイツをぶっ飛ばしてくんね？」

俺のその言葉にナミはすぐにOKした。
ナミもムカついてたんだきつと・・・。

「お、お前ら・・・俺に手を出してみる・・・ただじゃすまない
からな！」

え？

まだ何もしてないのに、ナミが武器出しただけでビビってるよ・・・
。本当に大佐か？

ドガッ！

あ。

バキッ！

デュクシュ！

と言ったので、ナミはネズミの髭を離した。

「覚えてろよ黒服の男！」

ええ？

俺じゃないだろ！ナミだろ！

と心の中で思ったが当然口には出さない。

「お前のことを調べ上げてやるからな！」

あ、このままじゃルフィが賞金首にならない？

そう考えた俺は、ネズミの耳元で「俺たちは海賊だ。船長はモンキー・D・ルフィ。麦わらの一味だ」と小声で言った。

それからネズミは何かを叫びながら俺たちの前からいなくなったが、俺はもうどうでも良かったためにほとんど聞いてなかった。

さてと・・・。

「急な邪魔が入ったけど、続けるぜ？」

「え？あ、うん」

ナミは思い出したかのように俺の方に体を向き直した。

「えっと、二つ目はあんたが麦わらの一味に入ること」

「！！！？」

ナミはなんであんたがそんなこと・・・とでも言いたいのだろうか、俺はすかさず次の頼みを話す。

「三つ目は俺について何も聞かない」

「・・・・・・・・っ」

この言葉でナミは俺に言いたいことを止めたのだろう。開こうとした口を無理矢理閉じた。

「最後に．．．俺は妻わらの一味に入りたい。そこで、ルフィにあんたが口添えしてほしい」

「どうして．．．」

ナミが何か言おうとしたので、俺は「俺について何も聞かない」と念を押した。

「ダメな頼みはあるかい？」

俺がそう言つとナミは少し考える素振りを見せたが、すぐにすべてを了承してくれた。

「あんたには大きな借りがあるしね」

そう言つてナミは右手を差し出した。

「私、ナミ！ルフィの仲間になるなら、私とも仲間ってことよね？」

俺はナミの右手を取り・・・。

「黒瀬 新一。よろしくな・・・ナミ」

「シンイチ？なんか呼びにくいわね・・・」

そう言うとナミは俺に背を向けて歩き出した。

「何やってんの？早く村に行くわよ、シン！」

どうやら俺はこの世界でシンと呼ばれることになるんだろうなぁっ
と思いながらもナミと一緒にココヤシ村に向かった。

その道中で「ココヤシ村っていう村があるんだけど」と、ナミは
嬉しそうにココヤシ村について俺に教えてくれた。

まあ、ココヤシ村は知ってるんだけどなぁーっと思いながらも、ナ
ミから聞く話は原作にはなかった話などもあったので新鮮で退屈せ
ずに歩けた。

しかし、時折左肩を見て悲しい顔をしていた。

そっか・・・俺がアールンを倒したことによって、ナミはこの左
肩をナイフで刺さない。

一生消えない刺青がナミを苦しめるのなら．．．。

「ナミ、ちょっと目を閉じてくれない？」

「え？なんで？」

まあ、いきなり目を閉じては不自然だったか？

「いいから5秒だけ閉じて」

ナミは少し疑い「変なことしないでしょうね？」と言いながらも目を閉じてくれた。

目を閉じたのを確認した俺はナミの左肩に触れた。

ナミは一瞬身体を固まらせたが、俺が開けていいよと言うと安心した顔を見せた。

「これ．．．一生消えないのに．．．．えっ!？」

目を開けたナミは自分の左肩を触ろうとして動きが止まった。

「な、なんで??刺青が．．．」

そう。

みんなもご存知の『オールフィクション大嘘憑き』だ。
でもまだナミには言わないけどね！

「これ、シンがやったんでしょ？」

ナミが掴みかかるんじゃないかと思われるほどの勢いで近付いてきたので、俺は「さあね」とはぐらかした。

このやりとりはココヤシ村に着くまで続いたが、俺は最後まで言わなかった。

ナミへのお願い（後書き）

なんか全然進んでないような・・・笑
なので1日に出来るだけ更新したいと思います!!
みなさん、よろしくです

道化師？

ん．．．。

「あ、ここは．．．」

一人の男が深い眠りから覚める。

「アタシン家だよ」

気がついた男に女が話かけた。

「へ？へえ？」

「気がついた？」

「あ、お前は．．．」

「アタシはノジコ、ここでみかん作ってんの」

どうやらノジコとウソップのようだ。

ゴサの町で魚人と遭遇したウソップはノジコを助けるために魚人と戦おうとしたが、逆にノジコに気絶させられて今に至る。

原作ではここにゴサの子ども．．．チャボもいたが、ここにはいない。

「おーーーーーい、みんなあーーーーー」

ウソップとノジコが話していると村中に聞こえる声で子どもが叫んでいる。

村から離れた位置にあるノジコの家にも声が届いているのがその証拠だろう。

「な、なんだ!?!」

ウソップが何事かと立ち上がって窓から外の様子を見ている。
もちろんここからは何も見えないのだが・・・。

「・・・・?」

ノジコも村の方から聞こえる元気な声に、違和感と興味からか耳を澄ませている。

アーロンがこの島に来てから、誰もこんな元気で嬉しそうな声を出したことがないのだろう。

おおおおおおおお!!!!

村の方からまるで地響きが起きるのではないか？というほどの村人たちの声が聞こえる。

何かあったのか・・・ノジコはそう考え、急いで家を出て村に向かった。

その行動を見ていたウソップもノジコに次いで家を出る。

「何かあったの？ゲンさん!？」

ノジコは村に着いてすぐに近くにいたゲンゾウに聞く。

「おお、ノジコ!！」

ゲンさんもなんだか嬉しそうな顔をしてノジコを見た。

「聞いて驚くなよ?。」

「な、なに?。」

ノジコは何か起こっているのかわからないため、不思議そうに聞く。その時、ノジコの後を追っていたウソップも村に到着した。

「あのアーロン一味が壊滅したそうだ!!」

「ええ!？」

ノジコは信じられないと言った感じでゲンさんを見ている。

「我々も今この子から聞いたんだが・・・」

そう言っただけでゲンはチャボを見た。

「あの子が？」

ゲンの目先にいる子どもをノジコも見つめた。

「でも、どうして・・・」

ノジコがそう呟くと、チャボはここにいる全員に聞こえるように「俺、見たんだ! 魚人が血だらけで倒れてるところを!!」と言う。

村人もチャボの言葉を信じていないわけではないが、全員で確認しに行くことにした。

一人一人が念のため武器を持ち、今まさにアーロンパークに向かうと一歩踏み出したその時、アーロンパークへの道から歩いてくる2つの人影が見えた。

「ねえ！どうやってあの刺青を消したのか、いい加減教えなさいよ！」

ふう．．．。

ナミってしつこいんだなあ．．．．。

さっきまで嬉しそうに昔話してたじゃないか。

ん？

ココヤシ村に人が集まっている。

ああ、チャボがみんなに知らせたんだった。

俺はナミの質問を回避しようと「ココヤシ村に人が．．．」とナミに話しかけた。

「わかってるわよそんなこと！」

見ればわかる。っというようにナミが言う。

ココヤシ村に足を踏み入れた俺たち2人に村人たちが走って寄って来る。

俺たちつかナミにだが……。

ノジコだけは「アンタ……」と俺に気付いてくれた。

村人たちはナミに魚人のことについてとかいろいろ聞いている。

魚人たちの壊滅がナミの言葉によって確定したので、村人たちは涙を流しながら喜んでいる。

今夜から騒がしくなりそうだ。

俺が少し離れたところからナミや村人たちを見ると、アーロンパークの方から大きな音がした。

しかし、村人たちは特に聞こえていなかったのか気にするような素振りは見えない。

俺も特に気にしなかった。

ん？

いつの間にかウソップが俺の横にいた。

近くで見るとやっぱり鼻が長い。俺は衝動的にウソップの鼻を掴む。

「って何してんだデメー！ー！！」

おお！ウソップの初ツッコミだ。

それからウソップにガミガミ言われたが、俺は愛想笑いで受け流す。

「ナミ！ー！ー！ー！ー！！」

突然聞こえた大きな声に今まで騒がしかった村人たちも静かになった。

「ルフィ！！」

俺の隣にいたウソップが声の主に反応して言った。

生ルフィだ！！

俺はルフィを見て感動したが、顔には出さずにルフィを見ていた。

それから数時間が経ち、夕方になったココヤシ村にはアーロン一味の壊滅の知らせを聞いた島中の人間が集まって宴会をしている。ルフィたちも何かなんだかわからないのに宴会に参加しているところを見るとさすがと言っべきか．．。

もちろん、ココヤシ村に到着したルフィの仲間のゾロは“鷹の目のミホーク”との戦いでついた大きな傷の手術。そんなゾロも手術終わりの体で宴会に参加していた。

「ルフィ！」

俺は生ハムメロンを探していたルフィに声をかける。もちろんナミも一緒だ。ルフィは両手に肉を持ちながら「ん？誰だオメー？」と俺を見てそう言う。

「俺をルフィの仲間に入れてくれないか？」

単刀直入に言った。

ルフィが俺をまじまじと見ている。

．．．肉を食いながら．．．。

「ルフィ、私からもお願い！シンは私たちを救ってくれたの！悪い奴じゃないってことは私が保証するわ！」

俺の横にいたナミがそう付け足してくれた。

ルフィは食べている肉をゴクリと飲み込むと「お前シンって名前なのか！いいぞ！」と言った。

軽っ！！

さすがルフィだ。

こうしてルフィたちの仲間になった俺は後々ゾロたち3人も紹介された。

ウソップには「もう鼻を掴むなよ？」と言われたが、それは約束でない。

そして数日後の朝、ココヤシ村の村人たちに見送られて麦わらの一味は出港することになった。

地味にヨサクとジョニーも挨拶していたが、俺はそういえばいたんだ．．．という感想しか持たない。

メリーに感動しすぎて忘れてたよ。

もちろんあの宴会の時にノジコとも話をした。

俺を助けてくれた？お礼の言葉とある約束をノジコと話したのだ。

それからナミが俺のことを村人たちに話したことによって、宴会は俺にお礼を言いたいという人たちで溢れかえった。

おかげでほとんど寝れずに今に至るわけだが．．．．。

「船を出して！！」

そんな中で不意に響いたナミの声に、意味が分からないながらも俺たちは船を出した。

村人達に礼を言わせる事も、また別れを言う事も無く行ってしまふのかと、船に向かって走り出すナミを皆が止めようとするが、彼女は人々の間をすり抜けると一気にゴーイングメリー号に飛び移る。

そしてＴシャツの裾を上げ、村人＋ジョニー・ヨサクの全員から盗んだ財布を甲板に落として見せた。

「皆、元気でね」

「やりやがった、あのガキヤ ツ！！！！」

ここは原作通りなんだと思うと感動してしまうシン。

そんなナミに泥棒猫とか、財布を返せとか、そんな言葉に混ざって、いつでも帰って来い、元気でやれ、そんな風に村人たちは叫んでいる。

彼らもまた、それがナミらしさであり、これから楽しんで欲しいと思うからこそそう言ったのだろう。

ナミは満面の笑みを浮かべ、叫ぶ。

「じゃあね、皆！！！！行つて来る！！！！」

船から見たアーロンパークは粉々に崩れていた。

そう思った後ろでルフィたちが「あれ、魚人たちの家だったんだな」などと話している。

もしかして原作とは違う場所のアーロンパークに船ごと突っ込んだのか？と思ったが口には出せないよな？

そして、ココヤシ村出港から数日が経った。

俺たち麦わらの一味は“グランドライン偉大なる航路”を目指し、船を進めている。

ウソップは後ろの甲板で“タバスコ星”とやらを開発中だし、サンジはナミが故郷から持ってきた蜜柑の木の警備をしている。

どうやらルフィがその蜜柑を盗もうとしたので警備しているようだ。

ナミは買ったばかりの新聞を読み進め、ゾロは甲板で一人、昼寝の体制に入っている。

俺は特にすることもないので、アーロンパークからの帰りの道中に出来なかった千本桜の出し入れの練習を誰にも見つからない所でし

ていた。

んゝやつぱりあれはまぐれだったか・・・。

全然抜けねー！。

その時、「」「」「ああああ　　っ！……」「」「」という声が船に響き渡った。

俺はルフィたちの所に駆けつけると、みんなが見ている紙に視線を落とした。

「なっはっは！見る、シン！俺たち“お尋ね者”になったぞ！」

そこには2枚の手配書があった。

モンキー・D・ルフィ
(麦わらのルフィ)

懸賞金：3000万ベリ

これは原作通り・・・あとの1枚は・・・。

クロセ・シンイチ
(道化師)

懸賞金：2700万ベリ

おお！！

俺も賞金首に！！

でも道化師って・・・。

おそらくアールンとの戦闘を見ていたネズミのせいだろう。

サンジとウソップは新入りがいきなり懸賞金がついた俺に納得がいかないようだったが・・・。

ウソップはルフィの手配書に写っている自分の後頭部を発見して満足しているようだった。

俺たちが手配書で騒いでいると、ゾロが「おい、島がみえるぞ」とナミに言った。

「あの島が見えてきたってことは、グランドライン偉大なる航路に近ずいてきたってことね」

ナミはルフィたちに説明するように言う。

「あそこには有名な町があるの。」

『ローグタウン』・・・別名、“始まりと終わりの町”。かつての海賊王、ゴールド・ロジャーが生まれ・・・そして処刑された町。

・・・行く？」

ルフィはそのナミの言葉に「行く!!」とだけ言った。

そして俺たちはローグタウンに上陸する。

道化師？（後書き）

なんかあれよあれよと言う間にルフィの仲間になってしまいました。
笑

今回はローグタウンまで書きたかったので少し長く、そしてちょっと薄くなってしまいました．．．泣

でも、今の俺ではこれがベストです！

シンの感情ももっと入れたかったのですが．．．まあいいでしょう！笑

あ、これから新一のことはシンに統一させますね。。

でも、黒瀬 新一という名前は忘れないであげてください！笑

海軍大佐スモーカー

「うつひょー！でつけえ町だなー」

ローグタウンに上陸した俺たち6人は大きな門の前にいる。

「かつては偉大なる航路グランドラインへ向かう海賊たちで賑わった町よ。必要なものな何でも揃うわ」

ルフィが言った後にナミがローグタウンについて教えてくれた。

そして各々買い物があるようでウソップは装備集めに、サンジは食料の補充と．．．ナンパもするらしい。

ゾロはナミにお金を借りて新しい刀を買うようだ。利子は3倍なのはかわいそうだったが．．。

「あ、ナミ．．．実は俺も買いたい物があるんだけど．．．」

俺はゾロとナミの会話を聞いていたので利子のこと考えたが、生活に最低限必要な物は揃えたかった。

「シンならいくらでも貸してあげるわよ?というより返さなくてもいいわ!」

「!?!」

それを聞いたゾロはナミに猛抗議したが、ナミは考えを変えなかった。

そっか・・・6個目の・・・。

俺はあることを思い出し、ナミのその言動にも納得した。
もちろん、ナミの故郷を救ったお礼なのかもしれないが・・・。

そしてルフィは、特に買い物はないので処刑台に行くらしい。

結局全員がバラバラの行動をすることになった。

バンツ！

「スモーカー大佐！大変であります！！」

ローグタウンにある海軍基地であの海兵が言いながら部屋の扉を開けた。

部屋の中は煙で真っ白になっている。

その部屋の中にスモーカー大佐という人物がおそらくいるのだろうが、煙でよく見えない。

「本部より連絡です。モンキー・D・ルフィ率いる海賊の一味がこのローグタウンに向かったと情報がありました。
イストブル

東の海の3000万と2700万の賞金首が出た海賊たちです！」

海兵がそう言うと、中にいたスモーカーが口を開く。

「3000万と2700万……こりゃゝめでてえこった」

「首領・クリークや魚人アロンすら倒した凶悪極まりない悪党です！」

「静かにしろ!!」

海兵がそう付け足すが、スモーカーに一喝された。

ガラガラガラ．．．．。

スモーカーはどうやら石積みのようなことをしていたようだ。しかしその石が崩れてしまった。

「ああ．．．．」

そう言いながらスモーカーは立ち上がる。

「でけえ声出しゃがって！壊れちまったじゃねーか」

その石が壊れたのを海兵のせいにするスモーカー。そう言われた海兵は律儀に「すみません」と言う。

「ダメだな．．．気がはっちまってよ。俺には俺のペースがある．．

「そうだろ？」

「は、はい」

そしてスモーカーは窓を開けて部屋中に広がっていた煙を外に逃がした。

「で？なんだって？」

ふう．．．。

とりあえず生活に必要な物は揃ったな。

俺はある程度の買い物を済ませて、これからどうしようか考えた。

本当は誰かに同行して見たかったこともあるんだけど……。
ゾロの武器屋での行動とかさ。

まだ雨は降ってないから事件は起きないだろうし……。

とりあえず俺は近くにあったベンチに座った。

ココヤシ村でのことでわかったことがある。

まず、原作キャラを倒すことで他の漫画のスキルを神様から貰うことができる。

ただしモブキャラではダメ……最低でも原作で重要なキャラ付けがされているキャラじゃないとダメだということはアーロン一味で確認出来た。

そして貰えるスキルはランダムに決められる。

これが厄介なんだよなあ……。。

今あるスキルでも十分だけど、あと一つ欲しいスキルがある。

それは身体的な力だ！

いくら大嘘憑きで死なないからといっても、基本的な戦闘力は欲しい。
オールフイクション

最低でもこの世界のモブキャラぐらいは動きたい。

アーロンの時もそうだったけど、せめて相手の攻撃を避けられるぐらいのスピードは身につけたいな．．．。

今あるスキルは7つ。

その内使えるのは最初に貰った3つだけか．．．。

『はねる』もジャンプ力が上がるわけでもない．．．ただ本当に文字通りはねるだけの力だったしなあ。

あ。

シンの目の前にはあのスモーカーの姿があった。

どうやら女の子にアイスをつけられるあのシーンのようだ。

やっぱりスモーカーは優しいな。

俺はそんなことを思いながら、その光景を見ていた。

くろせしんいち
黒瀬新一。21歳。

身長172cm

体重55kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。
顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。
誰にも気付かれないほどのポーカーフェイスが出来る。
神様から与えられた能力は【大嘘憑き（オールフィクション）】、
【千本桜】、【邪眼】の三つ。

麦わらの一味での役割は不明。

オールフィクション
【大嘘憑き】

すべて なかつたこと
現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかつたこ

と」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる（因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。

神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることによって桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまったため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『くもさくら』）」。卍解時にも唱えることがある。

神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。24時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。
アーロン一味の幹部の八手を倒したことで神様から貰った四つ目の力。

【どんな物・場所でもあらゆるアングルから資料なしで描けるスキル】

漫画『バクマン。』に登場する中井巧朗なかいたくろうの漫画を描くためのスキル。
アーロン一味の幹部のクロオビを倒したことで神様から貰った五つ目の力。

【ハーレム体質】

漫画『TO LOVEる』に登場する結城梨斗ゆうきりくとが持つ魅力がスキルとなってシンに与えられた。
アーロン一味の幹部のチュウを倒したことで神様から貰った六つ目の力。

【天性の歌声】

漫画『BECK』に登場する田中幸雄たなかゆきおの世界の著名なミュージシャンも一聴でうならせる才能をスキル化して神様から与えられた。
アーロンを倒したことで神様から貰った七つ目の力。

海軍大佐スモーカー（後書き）

今回は本編が短くなってしまってますみません。泣

あ、いろんな感想をいただきました！！

ありがとうございます

意外にも『はねる』についていろんな方から指摘を受けまして・・・。

ちょっとネタバレになってしまいかもですが、一つだけみなさんに言っておきます！

えゝ神様から貰った力はたとえどんな力でも必ず一回は活躍します。
とだけ言っておきましょう・・・。

なので今回、2回目のシンのプロフィールを載せました！

また力が増えた時に新しいプロフィールを載せたいと思います！！

狙われた道化師！夢を語る嵐の船出

「悪いな、俺のズボンがアイス食っちまった。今度は5段を買うつ
いい」

スモーカーはそう言って女の子にお金を渡した。

ん？

俺・・・か？

スモーカーがお金を渡して立ち去るのかと思いきや、こちらを見て
少し驚いた表情をしている。

ああ、そういえば俺は賞金首だったんだっけ？

俺はそんなことを考えながら逃げる準備をする。

「スモーカー大佐、あいつが先ほど言いました麦わらの一味の一人ですよ！」

スモーカーの後ろにいた海兵が言う。

「麦わらの一味だと!？」

それを聞いたスモーカーは驚きの声を上げる。

「はい、懸賞金2700万ベリー!道化師のクロセ・シンイチです」

後ろの海兵がなんか言ってるようだが、今はそんなことどうでもいい。

俺は焦っていた。

今の俺ではスモーカーに勝てないことぐらいはわかっている。

覇氣が使えない俺では、例え千本桜を使いこなしていても自然系ロギアには攻撃を与えられない。

だから逃げるしか選択肢はないんだが……………。

チツ…………。

なかなかスモーカーと目が合わない。

普通に逃げてもすぐに捕まってしまう。だから俺はアイツに邪眼を使うしか逃げる方法がないのに……。

シンがそんなことを考えていると、スモーカーはシンに近付いてきた。

「結局同じか……」

「!？」

スモーカーは小さい声でそんなことを言った。

結局同じ？どついうことだ？？

ドッ!!

俺が疑問に思ったとほぼ同時にスモーカーに攻撃された。

クソッ！ホワイトブローか……。

俺は壁に叩きつけられたが、オールフィクションすぐに大嘘憑きでダメージをなかったことにした。

散々練習してきたんだ。

百発百中だぜ！！

スッ……。

俺は千本桜を難なく抜ききった。

ダメージが与えられないのは知ってるが、目くらまし程度にはなるだろうよ！

「散れ！千本桜！！」

解号とともに消える刀身。

その直後にスモーカーを切り刻んだ。

が、やはりダメージは与えられない。スモーカーは煙となる。

その瞬間に俺は逃げようと走り出そうとしたが目の前にはすでにスモーカーの姿があった。

「めんどくさい奴だ」

とつと諦めやがれ！

俺はこの間にも表情を変えない。

あくまでもクールキャラでいたいんでな。

しかし本当にめんどくさい。

たとえ卍解しても今の状況は変わらないだろう。

俺はチラッと空を見た。

大分曇ってきたな・・・。

そろそろルフィはバギーに拘束されるだろう。

そう思った俺はスモーカーに「もう終わりにしようか」と言った。

「スモーカー大佐！」

その時、どこからか走ってきた別の海兵が「広場に麦わらのルフィが!」とスモーカーに報告に来た。

「放っておけ!」

「で、ですが……」

「俺に指図すんなって言ってるんだ」

クソッ!

あくまで狙いは俺か……。

でも……。

俺はその海兵の報告を聞いてメリー号のある船着場に向かって走り出した。

「逃がさねえ……!」

カーーーー。

スモーカーの行く手を阻むかのように現れるカラスの大群。

「なんだこいつら！」

さすがのスモーカーも一瞬の隙が出来て、俺は逃げることに成功した。

カラスが空にいてくれて助かった・・・。

これで一分間はスモーカーを敵だと認識してくれるはずだ。

俺は急いでメリー号まで走る。

ドドオオオオオン！！

そんな轟音が鳴り響いたと思ったら、ポツポツと雨が降ってきた。

はあ．．．．はあ．．．．。

メリー号にたどり着いた時には、もうウソップとナミが船に乗っていた。

地面にはモージが倒れている。

リッチーは．．．．．まだ卵を食べていることからそんなに2人が到着してから時間が経っていないのだろう。

とりあえず俺もメリーに乗り込み、3人を待つことにした。

それから数十分、やっとルフィたちが帰ってきたので急いで船を出港させる。

それにしても凄い荒れようだな。

俺はナミの指示で、慣れない船の操作をする。

ルフィたちは帆に気を配ったりといろんなことをしていた。

「うつひゃー船がひっくり返りそうだ！」

なかなか大変な状況なのだが、ルフィの声を聞くとなんだか安心する。

やっぱり船長なんだな。

俺がそんなことを思っていると、ナミが何かに気付いたようだ。

「あの光を見て！」

ナミの言葉に、全員が同じ方角を見る。

「島の灯台か？」

マストに括っていたウソップがナミにそう尋ねる。

「導きの灯。あの光の先に偉大なる航路グランドラインの入口がある」

「あの先に偉大なる航路グランドラインが・・・」

ナミの言葉に、ルフィが呟く。

「どうする？」

そりゃーもちろん。

「行くよな？ルフィ」

ナミと俺でルフィに尋ねる。

ウソップはビビッていたみたいだが、ゾロとサンジも行く気満々みたいだ。

和むぜ、ウソップ。

みんなの意思が固まったところで、サンジが樽を運んできた。
どうやら進水式をやるらしい。

あ、忘れてた！

夢・・・・・・・・。

俺の夢・・・・・・・・。

シンが悩んでいるうちにみんなは樽に足を乗せて夢を語り出す。

「俺はオールブルーを見つけるために」

「俺は海賊王！！！！」

「俺ア大剣豪に」

「私は世界地図を描くため！！」

「俺は・・・・世界を見るため！！」

とりあえずウソップよりは早くと思ってこう言った。

悪くないだろ？

みんなは一瞬固まって俺を見たが、すぐに笑みをこぼした。

「お・・・お・・・俺は勇敢なる海の戦士になるためだ！！！！」

そしてすぐにウソップも自分の夢を語る。

少しの静寂が辺りを包み、風と波の音だけになるが、

「いくぞ！偉大なる航路！！」
グランドライン

「「「「「おお！！」」」」」

狙われた道化師！夢を語る嵐の船出（後書き）

ローグタウンで見たかったなあ．．．。

ルフィの「俺は海賊王になる男だ――！！」
そして早くも偉大なる航路ですよー
グランドライン

次回は会えるでしょうか．．．ラブーンに！笑

運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！

進水式も終わり、俺たちは嵐が続くなか偉大なる航路グランドラインを目指していた。

現在はナミがしっかりと進路の確認を欠かさずにしてくれているので、俺たちは休憩を取りながら今後のことを話そうとしていた。

「そういえばシンは世界を見たいって言ってたけど・・・」

そう言ったのはウソップだった。

「ああ、偉大なる航路グランドラインにあるいろんな島や人、生き物や現象を見てみたい。もちろん・・・みんなの夢の果てもな」

俺は素直にそう答えた。

それを聞いたルフィが「シッシッシ」と笑い出す。

「シンは、やっぱり副船長に決定だな！」

ルフィが唐突にそんなことを言い出した。

周りのみんなも驚いた表情をしている。

「おれ、初めてシンに会った時から決めてたんだ!!」

「え．．．いいのか？」

俺は確認するように言葉を発した。

「船長命令だからな」

「その代わりしつかり頼むぜ？副船長」

「嫌ならいつでも代わってやるからな！」

「もちろん私は構わないわ！」

ゾロ、サンジ、ウソップ、ナミも了承してくれた。

俺が麦わらの一味の副船長か。

こりゃー本当にしつかりしないとな。

シンの副船長昇格の話が終わったところで、ナミはテーブルに海図を広げると口を開いた。

「一つ分かった事があるの。いい？ “グランドライン偉大なる航路”の入口は山よ」

「「「「山!?!?!」」」」」

いきなりの突拍子もない言葉にみんなは首を傾げる。

しかし、どうやらナミは本気のように海図を指指して説明を始めた。
俺はもちろん知っていたが、驚いたふりをしてみんなに合わせる。

「導きの灯が差してたのは間違いなく此処……レッドライン赤い土の大陸にあるリヴァース・マウンテン」

「何だ、山へぶつかれたのか？」

「違うわよ。ここに運河があるでしょ」

ゾロが疑問をぶつけると、ナミはすぐにそれを否定した。

ゾロとウソップはまだ、ナミの言う事を信じていないが、ルフィは
なんだか楽しそうだ。

「そもそも、何で態々“入口”へ向かう必要があるんだ。南へ下れ
ば、どこからでも入れるんじゃないか？」

「それは違うぞお前っ!!」

「そう、ちゃんと訳があんのよ」

「入口から入った方が気持ちいいだろうが!!」

「違うっ!!」

そんな原作と同じ会話を俺は特に参加もせずに聞いている。

この感じ……やっぱり和むわあ。

俺がそんなことを思っていると、急に外が静かになった。

「しまった……“カームベルト 嵐の帯”に入っちゃった……」

外を見たナミが半泣き状態で言う。

そうか……カームベルト 嵐の帯のことをすっかり忘れたよ。

「ちょっとあんた達、早く帆を畳んで船を漕いで！嵐の軌道に戻るのよ！！！」

ナミが怒るように指示している。

サンジだけは笑顔で頷いたけど、他の面々はイマイチ事情が分かっていない様子だ。

帆船なのにどうして漕ぐのか、何故態々嵐の中に戻るのかと、しきりに首を傾げている。

すると、不意に地震かと思えるような大きな揺れがメリー号を襲った。

全員が外に出ると、メリー号は海王類の額に乗っていて、下を覗き込めば多くの海王類に囲まれていた。

「い．．．いいな、兎に角．．．！！こいつが海へ帰っていく瞬間に思いっきり漕ぐんだ！！」

俺たちは大きなオールを担ぎ、ジッとその時を待つ。

が、そう簡単に終わらせてくれないらしい。海王類は急に顔を傾け、大きくしゃみをしたからだ。

当然、海王類の上にいたメリー号は凄じ勢いで飛ばされる事となった。嵐の方に向けて飛ばされた事だけが、唯一の救いだ。

途中、ウソップが巨大な蛙に食べられそうになったりしながら、何とか嵐の中に戻ってきた。

俺はその時の疲れを大嘘憑オールフイクションきで無かったことにしたため元気だが、ほかのみんなはひどく疲れている。

「あ、分かったわ．．．．．やっぱり山を登るのよ」

そんな中で不意にナミは言い、海流の影響だと説明した。

四つの海の大きな海流が全てあの山に向かっているとしたら、四つの海流は運河を駆け上って頂上でぶつかり、偉大なる航路グランドラインへと流れ出る。

この船はもう海流に乗っているから、あとは舵次第という訳だ。

「リヴァース・マウンテンは“冬島”だから、ぶつかった海流は表

層から深層へ潜る。誤って運河に入り損なえば船は大破・・・海の藻屑^{（もがら）}つてわけ。分かる？」

まだ疲れが残っているみんなに対してナミは言う。

俺は海の仕組みとかは良く分からないが、海流に乗った勢いのままリヴァース・マウンテンに衝突しかねないという事だろう。

ルフィは“不思議山”の一言で片付けていたけれど、そう考えるとかなり重要な話だ。

一歩間違えれば、夢を叶える事もなく命を落す事になるのだから。

それから間もなく赤い大陸^{レッドライン}が姿を見せた。

視界の先には、海が山に登る後継が広がり、一同はその凄まじさに目を瞠る。

ここが運河の入口か・・・少しでも位置がずれば、船ごと海の藻屑となる恐怖の場所。

ウソップとサンジが二人がかりで舵をきり、向きを定めていく。

が、そこでまたハプニングが発生した。力を入れすぎたのが原因か、命綱である舵が折れたのだ。

ルフィがその能力を駆使して無理やりに船を方向転換してくれたの

で、何とか無事山を登り始めたが、もうこのまま死ぬのではないかと本気で思ったのは言うまでもない。

そして、メリー号が運河を登りきって下り始めた。

「おお見えたぞ　グランドライン　偉大なる航路”　！！！！”」

ルフィが大きな声で言う。

さあ、ここからが俺の冒険の始まりだ。

俺は期待を胸に膨らませ、船の前方をみんなと一緒に見る。

しかしここから、原作とは少し違うONE PIECEをシンは見ることになるのだった。

運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！（後書き）

さてさて、ここからがこの小説の本番！笑

今まで以上に気合を入れて書いていきたいと思います！！

見られない決闘？ラブーン出港への咆哮

ブオオオオオオオ．．．．．！！！！

偉大なる航路に入った俺たち麦わらの一味は双子岬に向けて船を走らせていた。
グランドライン

風の音に紛れてラブーンの声が聞こえる。

ほかのみんなはこの声を気にしているが、俺はおもしろそうなのでそのまま黙っていた。

と、メインマストに登っていたウソップとサンジが、行く手を遮る山を発見した。

この先の“双子岬”を越えたら海しかない筈なのにとナミが言う。

「もしかして．．．．その“山”が鳴き声の主？」

続けてナミが気がついたように言った。

数秒後．．．．残念ながら、予想が当たっている事が判明した。
大きな鳴き声をあげ、山のように行く手を遮っていたのは信じられないほどの大きいクジラだったのだ。

「ちょっと待て、ここまで近付くと、ただの壁だ！．．．まず目はどうだよ！！」

「体の両側．．．．じゃない？ってことは、向こうは私たちに気付いてないのかな？」

「気付いて邪魔しに来た訳じゃなくて、偶然出てきた所だった、って事？」

本当の所など分からないけれど、襲ってくる様子もないので、多分気付いていないのだろう。

これだけ大きな体をしていると、その目で見える範囲も限られているのかも知れない。

どちらにせよ、このままだと衝突して船が大破しそうなので、危機的状况に変わりはないのだが。

「おい、良く見りゃ左が少し空いてる！とり舵だ！！」

「舵折れてるよ！！！！」

「何とかしろよ、俺も手伝う！！！！」

折れた舵で何処まで出来るか分からないが、何もしないまま終わるよりマシだ。

ゾロ・サンジ・ウソップの三人がかりで精一杯舵をきり、何とか船体を曲げようとするがどんなに強く引いても上手くはいかず、クジラはもう目の前まで迫っている。

が、不意にクジラ目掛けて大砲が放たれ、船は緩やかに動きを止めた。

それでも、クジラにぶつかってしまったので、ルフィの特等席であるメリーの船首が折れてしまったし、態々相手に自分たちの存在を気付かせる事になってしまったしで、とても“良い”とは言えないが。

まあ、俺の大嘘憑オールフィクションきで治してあげてもいいけど・・・。

フランキーやサニーのことを考えるとやらないほうが良いのだろう。

それに、メリーとの冒険もなかったことになってしまっくんじゃないかと俺は考えた。

まだ俺はメリーとの冒険は少ないが、なんとなく嫌だった。

俺がそんなことを考えている間に、一同はゴクリと息を呑み、ラブーンの出方を伺っているようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・に、逃げる今の内だア！！！」

砲撃に気付いていないのか、または単にトロイのか、ラブーンは全く動かない。

という訳で、先ほど舵をきっていた三人で、オールを使い、ラブーンの左側を通り抜ける。

気付いているのか否か、劈くような鳴き声がその場に響き渡った。それでも襲われている訳ではないので、セーフだろうか・・・とり

あえずラブーンから離れようということで、努力する三人を他所に大砲を撃った張本人ルフィが現れて言った。

「お前一体俺の特等席に．．．．．何してくれてんだア！！」

何とルフィはその腕を伸ばし、近くに見えたラブーンの眼球を殴りつけたのだ。

ぶつかったのは此方なのだから、ラブーンが意図して特等席を壊した訳ではない上に、今まで“それでも”無事で済んでいた中での暴拳に、全員が声を揃える。

「「「「「アホ　　っ！！！！」」」」」

ついにラブーンの視線がメリー号を向いた．．．今、気付いたのだろうか。

対しかかって来いと構えるルフィの後頭部を、ゾロとウソップが二人で蹴り飛ばす。

次の瞬間、ラブーンは大きな口を開いて海水ごとメリー号を飲み込み始めた。

当然、逆らう術もなく、クジラの中へと吸い込まれていく。

そんな中で、ルフィだけが船からはじき出されてしまったが、持ち前の能力で何とかなる……だろうか。

「「「「「うわあああああ」「」「」「」

残念ながら、人の事を心配しているだけの余裕は、無かった。

知っていた展開とはいえ、やはり何かに食べられるというのは嫌なものだ。

ガンッ!!

ん？

「あ、気がついた？」

ナミ・・・？

俺どうしたんだっけ？

俺は体を起こして周りを見してみる。

ラブーンにはもうルフィが描いた約束の証がある。

「アンタ、ずっと気絶してたのよ？」

まだ理解していない俺にナミが優しく言うてくれた。

うわ．．．．．かつこわりい。

どうやらもう双子岬を出港するようで、ビビたちも船に乗っていた。

そのビビは何故か俺の顔をまじまじと見ている。

「アナタ．．．．．どこかで私と会ったかしら？」

今はミス・ウエンスデーと名乗っているはずだが、この言い方は完璧にビビだ。

とりあえず俺は、まだこの世界で会ったことは無いので「いや、初めて会うけど」と言った。

ビビは「．．．．．そう．．．．．」と言って甲板の方に向かう。

そんなこともありながらも、ゴーイングメリー号は双子岬を出港する。

ラブーンは大きな声で俺たちを見送ってくれた。

必ずブルックを連れて来るからな。

クロツカスさんとは話せなかったが、ウイスキーピークに向けて船を進める。

見られない決闘？ラブーン出港への咆哮（後書き）

次はウイスキーピークですね！！

ルフィVSゾロは実現するのでしょうか？

そして今回空気があったシンはどんな行動をするのか。

楽しみに〜

賞金稼ぎの巣？月夜に舞う千本桜

俺たちは今、^{グランドライン}偉大なる航路の一本目の航海を終えてウイスキーピークに上陸した。

島に着く前にビビ．．．．もといミス・ウェンズデーとMr・9は船を飛び出していったが．．．。

まあ、この島のどこかにいるんだろうけど．．．。

島に上陸してすぐに宴会が始まった。

ちなみに俺も参加はしたが、あまり酒は飲まずに酔いつぶれたふりをして倒れる。

宴会好きなルフィに怒られたくはないからな。

俺はあまり口を挟むのを好まない。

忠実な原作を生で見れるのだから当然だろう。

アーロンを一人で倒したのはノジコに恩返しがしたかったからだ。もちろん、ルフィに会うために海に出たかったから．．．というのも理由の一つではあるが．．．。

俺もずいぶんとONE PIECEの世界に慣れてきた。

というより最初の敵がアーロンだったから、普通の人間にはあまり

恐怖を感じない。

だからこそ俺は寝たふりまでして自分の力を試したかったんだが……。

一味全員が寝て、島の人間が一時的にこの建物からいなくなった。

俺はゆっくりと目を開けて見るが、すでにゾロの姿がない。

しまった！

先を越された。

「見ろ奴らの懸賞金だ」

イガラム……もといイガラッポイが手配書を出す。

「3000万と2700万!？」

「きつと何かの間違いだ！」

「そうだ！あんな弱そうな奴らが・・・」

そんな声が聞こえてきたので、俺はこっそりと外に出る。

ん。

屋根の上に上がるのはすぐめんどくさい。

でも、やっぱりかっこよく登場したいじゃん？

「なあ、悪いんだがな・・・」

「！！！！」

いやいやちょっとゾロoooooooooooo！！

まだ早いつて！

俺の思いも虚しく、ゾロは続けている。

「あいつらを寝かせといてやってくんねえか？ 昼間の航海でみんな疲れてんだ」

カッコイイーーーーー！！

ゾロ、アンタは物凄くかつこいいよ！

でも待って……もうちょっとだからさ！！

はぁ……はぁ……。

やっと登れた！

「剣士たるもの酒に吞まれるようなバカは、やらねえもんさ」

ゾロがかつこよくキメている。

「つまりこういうことだろ？」

俺もゾロに続いて大きめの声で言った。

「シン！？お前・・・起きてたのか？」

ゾロが驚いたように俺を見て言う。

俺はゾロのちょうど正面になる建物の屋上にいる。

賞金稼ぎ・・・バロックワークスたちを挟むような陣形だ。

「俺も気付いてたぜ？バロックワークス」

俺がそう口に出すと、賞金稼ぎたちの目の色が変わる。

「へえ」

ゾロは俺を関心している。

「シン．．．お前が戦うのは初めて見るなあ」

「俺もだよ．．．．．ゾロ！」

二人は遠い位置にしながらも雰囲気で声を合わせる。

「「相手になるぜ！バロックワークス！」」

ゾロはその言葉とともに姿を消す。

うわゝずるい．．．．。

俺もゾロみたいにかっこよく下に降りたいけど．．．．。

絶対俺が飛び降りたらドーーーーン！！ってなるよ。

オイルフィクション
大嘘憑きで無傷だとしても、ドーーーーン！！はなんかかっこ悪い．．．．。

仕方なく俺はその場で千本桜を解放する。

「散れ！千本桜！！」

ギャアアアア！！！！

千本桜の刃によって、何十人も賞金稼ぎが吹っ飛んでいく。

ゾロはゾロで何十人も吹っ飛ばしている。

（なんなんだアイツの刀？）

ゾロはシンの刀を気にしながらも戦い続けている。

げ！！

俺は恐くて……じゃないじゃない……接近戦が苦手な俺の後ろには数人の賞金稼ぎたちが！

いつの間によつてきたんだ？

俺は突然のことに焦りながらも、千本桜を戻して対処した。

ふう〜。

気がついて良かったぜ。

そんな危機も多少ありながらも俺とゾロは賞金稼ぎたちをぶっ飛ばした。

「やっと静かな良い夜になったな」

「ああ・・・」

チンツ・・・。

俺とゾロは静かになったウイスキー・ピックで酒を飲み交わす。

「それにしてもお前の刀はなんなんだ？」

あゝ．．．やっぱり聞いてきたか．．．。

俺は少し困ったが、ゾロということで簡単に誤魔化せた。

「なんだ、不思議な刀か！」

「ああ、俺も初めて見た時は驚いたよ」

「はっはっはっは」と二人で笑い合う。

さて．．．そろそろかな？

ドーーーーン！！

静かになったウイスキーピークに響く轟音。

Mr・5とミス・バレンタインがこの島に到着したようだ。

もう一仕事するか!!

俺はあることを忘れて爆発があつた場所にゾロと向かった。

賞金稼ぎの巣？月夜に舞う千本桜（後書き）

なんかタイトル負けしているような内容になってしまった。泣

それでもおもしろいと思って見てくれる方々・・・ありがとうございます！！
ございます！！

王女を届ける！！麦わらの一味三つ巴の攻防

「お二方！貴殿たちの力を見込んで、理不尽な願い申し立てまつる！」

イガラムがゾロの足を掴んでそう言った。

あれから俺とゾロは爆発のあった場所に到着し、ルフィを救出した。どうやらMr.5とミス・バレンタインがビビを追ってここに来て、イガラムたちはビビを守るために二人にやられたようだった。

その時、イガラムがゾロの足を掴んだというわけだ。

ゾロは掴まれた足を振りほどこうと必死になっている。その間にビビはカルーに乗ってどこかに逃げてしまった。Mr.5とミス・バレンタインも逃げたビビを追いかけて行ってしまう。

イガラムはどうしても俺たち二人に頼みたいらしく、ビビをアラバスタまで届けると莫大な恩賞を約束するとまで言っている。

あゝあ、そんなこと言っているのか？

「莫大な恩賞って本当？」

俺がそう思っていると、ナミが現れて言った。

やっぱり……。

ここからナミの交渉が始まった。

10億ベリーで了承すると言っている。

原作通り……。

でも結局貰えなかったのだから、この交渉にさほど意味はない。

結局ゾロがローグタウンでナミに借りたお金の利子をチャラにするという条件で、ゾロは納得した。

が、俺もナミにお金を借りているのをゾロは見ているので、そのことで激しくナミと揉めていた。

しかしナミは「シンにはお金を貸したんじゃないやなくてあげたの!」と言ってくれたので、俺はなんとか逃れられた。

ゾロがビビを助けに行ってから少し経ち、俺とナミはイガラムからアラバスタについてなどを聞かされている。

ん？

ルフィがいない・・・。

あ！！

俺はすっかりこの展開を忘れていた。

ルフィの勘違いでゾロとルフィが戦うことを・・・。

俺はナミに、ゾロの帰りが遅いから様子を見てくると言っ
てその場を離れた。

やっぱこのシーンは見逃せないよな！

俺はかなりウキウキしながら現場に到着する。

「「ごちゃごちゃうるせえな!!」」

あれ？

もしかしてもう終わっちゃう？

「「勝負の・・・邪魔だああああ!!」」

うわーーーー、全然見れなかったーーーー!!

俺は早く来れば良かったと激しく後悔した。

「ウザってえ・・・」

「何だあいつら・・・」

Mr.5とミス・バレンタインをぶっ飛ばしても、まだ怒りが収まらない様子のゾロとルフィ。

その二人の先にはビビとカルーがいる。

「さてと・・・決着^{ケリ}つけるか！」

「おう!!」

二人は睨み合い、そして構える。

確か、この後すぐにナミが来てこのケンカを終わらせるんだっ
たな・・・。

俺はそんなことを思いながら、この話の結末を見ていた。

「「おおおおおおおおりゃ—————!!」」

ド—————ン———!!

「!?!?」

え？

ルフィとゾロの掛け声から数分．．．いや、まだ数秒か。

ナミは現れず、ルフィとゾロはまだ戦っている。

ど、どういうことだ？

こんな展開は原作でもアニメでもなかったはず．．．．．！！

もしかして俺がナミの様子を見てくると言っただから、ナミは安心して俺に任せてくれたのだろうか？

ってことはこのケンカ．．．俺が止めなくちゃならないのか？？

ん．．．．．無理！！

そんなことを考えてもまだナミは現れず、二人は怪我を増やしている。

このままでは、本当にどっちかが死ぬまでやりかねない。

そう考えた俺は二人を止めるために間に入った。

「なんだシン．．．」

「邪魔する気か??」

二人の目が異常に恐い・・・。

「もう止めとけ！目的は果たしてるだろ？」

俺はそう言ったが、二人は聞く耳も持たずに「そういえばお前もこの島の人を斬ったんだってな!!」とか言っつて、ルフィが俺にも攻撃してきた。

どんだけ怒ってんだよ!

そりゃゝ斬ったけどさ・・・。

ゴッ!!

痛ってえー!!

ルフィの拳が俺の顔面に当たる!

クッソ．．．。

いくら無かったことにしても痛いのは痛いんだからな！

頭に血が上ってしまった俺は、本来の目的を忘れて千本桜を抜いた。

「散れ！！」

スパッ！

「！！」

俺の解号が言い終わる前に、ゾロが俺の腕を斬り付けてきた。

痛つてえ．．．。

「いい機会だ．．．お前に副船長が務まるのか、試してやるよ」

そのゾロの言葉で、俺には味方がいないのだと悟った。

クッソ．．．。

こうなったら俺もやれるとこまでやってやる！！

完全に頭に血が上がり、ルフィ、ゾロ、シンの三つ巴の戦いが始まった。

「ゴムゴムのおおおおお・・・」

「三刀流・・・」

「散れ・・・」

三人が同じような距離に立っていたので、ほぼ同時に技をだそうとする。

シンにとっては、この三つ巴が良い結果になった。

一対一では解号をするにも大変だっただろう。それはさっきのゾロからの攻撃でわかった。

だが、今は三人がほかの二人を警戒して同時攻撃に意識がいつている。

結果、シンは簡単に解号することが出来た。

「バズーーーーカああああ!!」

「鬼斬りiiiiiiii!!」

「千本桜ああああ!!」

ドーーーーーッ!!

三人の技の衝撃波で周りの建物が崩壊する。

幸いビビはギリギリのところにいて、この衝撃波を受けずにすんだ。

「なんて人たちの・・・。強すぎる!!」

シンたちの戦いを見て眩くビビ。

それぞれ違う建物に吹っ飛んだ俺たちは同時に瓦礫から出てくる。

ルフィとゾロは血だらけだ。

それもそうだろう。シンが来る前から二人は戦っていた。

しかしシンも服はボロボロになっていた。

オールフイクション
大嘘憑きで痛みは無かったことにしたものの、服にかける時間は無いと判断したのか、無かったことにせずにもた千本桜で二人に立ち向かって行く。

同じようなことを何回か繰り返して戦う三人だったが、時間が経つにつれてルフィとゾロが千本桜を完璧にかわすようになってしまった。動物の勘というやつだろうか……。ほとんど刃が見えないはずだが、シンの攻撃を察知するとその場から離れてしまう。

シンはシンでまだ完璧に千本桜を扱えきれてはいないのだろう。手で操作は出来るようになったが、攻撃が単調すぎるし、ルフィとゾロのスピードについてはいけなかった。

周りから見ればこの三人は互角に見えるだが、実際にはシンの攻撃はこの二人にダメージを与えられずに二人の攻撃ばかりくらっている。

互角に見えるのは、シンがオールフイクション
大嘘憑きでダメージを無かったことにしているからで、ルフィとゾロにとってはただの不死身な奴くらいにしか思われていないだろう。

徐々にこの戦いは、ルフィvsゾロの形になっていく。

（やるしかない・・・か）

ルフィとゾロが二人で戦っているのはほんの数秒だが、シンは見て
いる形になった。

その少しの時間で、シンは目を閉じて刀に集中する。

いくぜ・・・・・・・・。。。

「卍・・・・・・・・解!!」

刀を切つ先から地面に落とすと、まるで地面に飲み込まれるかのよ
うに千本桜が消える。

ルフィとゾロも何かを察知したのか、一瞬シンに視線が奪われる。
ただ立っているだけに見えたシンの両サイドから千の刀身が浮かび
上がった。

「な、なんだありゃ・・・・・・・・」

「刀が・・・・・・・・」

ルフィとゾロは驚きを隠せない。

「正解．．．せんぽんざくらかげよし千本桜景厳」

シンがそう言った直後、千の刀身が一斉に舞い散った。

さすがにやばいと思ったのか、ルフィとゾロはそれらの刃をかわしながらシンに近付いてくる。

当然全てをかわしきれなかったのか、ルフィとゾロの腕や足に斬り傷がついていく。

だが、確実に近付いて来る二人の前にシンは数億枚の刃を盾にする。

そして、ルフィとゾロは．．．．．。

「やめろー！ー！ー！ー！ー！」という声とともに現れたナミによって殴られた。

ドサッ．．．．．。

その声を聞いて、シンも正解を解いて千本桜を鞘に収めた。

「あんたらねえー一体何やってんのよ！！シンもよ！」

俺は殴られずにすんだが、ナミに怒られてしまったので、素直に「すいません」と謝った。

結局それからは、ナミに怒られる意外は原作通りに進み、ビビをアラバスタまで届けることになった。

俺はお詫びとして、自らサンジとウソップを起こしに行ったのでアソラッキーズにも見つからず、バロックワークスに顔を知られることはなかった。

そういえば、あれからゾロは何も言ってこないけど、俺を副船長として認めてくれたんだろうか？

言ってこないってことはきつと認めてくれたんだろ！

俺はそんな適当な結論を出して、考えるのをやめた。

王女を届ける！！麦わらの一味三つ巴の攻防（後書き）

正直・・・この三人の戦いはもっと書きたかったですね。

でもたぶんやばいぐらい長くなってしまふのでは？と思って二つう結末にしました。

いやゝ本当にこの戦いは書いてて楽しくてねえゝ。

リトルガーデンやそれ以降の話は決まっているものの、もっとこういった話を書きたいと思ってしまいましたよ！

そんなこんなでウイスキーピーク編終了いたしました！！笑

次回からのリトルガーデン編もお楽しみにゝ

戦士たちの休息！？上陸リトルガーデン！！

ウイスキーピークを出港した俺たち麦わらの一味は、次の島に向けて航海を続けていた。

「雪降らねえのかなあ？」

そんなことを言い出したのはこの船の船長であるモンキー・D・ルフィだ。

「降るわけねえだろ！」

一本目の航海中にずっと寝ていて雪を見れず、そのルフィの言葉をバカにしたように言うのは戦闘員であるコロノア・ゾロ。

案の定ルフィに寝ていたことを指摘されている。

「なあ、雪はまた降らねえのかな？」

「降らないこともないけど、一本目の海は特別なのよ」

ルフィの質問に答えたのは、ウイスキーピークでこの船に乗ることになったネフェルタリ・ビビである。

ビビは内乱が起きている母国のアラバスタという国の王女で、俺たちはビビを無事にアラバスタまで送り届けるという約束のもとでこの船に乗っている。

「おーい、野郎ども！俺のスペシャルドリンク飲むかあ？」

そうやってそのスペシャルドリンクを持ちながら甲板に出てきたのは、この船のコックであるサンジだ。

そのサンジの言葉を聞いて、狙撃手であるウソップ、そしてビビについてきたカルーという動物のカルガモがスペシャルドリンクを求めてやってきた。

そこにルフィとゾロが加わって、4人と1匹はのんびりとそのスペシャルドリンクを飲んでいる。

和やかなその雰囲気を見て、ビビは少し苛立っているようだ。

ガチャっという音とともにビビの後ろの船室の扉が開く。

「いいの！？こんなんで？」

船室から出てきた人物たちにビビはそう聞いた。

しかし、その内の一人がサンジ特製のスペシャルドリンクをビビに差し出して言う。

「はい！アンタの」

笑顔でそう言ったのは、この船の航海士であるナミだ。

「俺は良いと思うけど？時化が来たらみんなちゃんと働くよ」

ナミの横でそんなことを言ったのは、この船の副船長になったクロセ・シンだった。

ビビはいろいろと悩みがあったようだが、この船の雰囲気にな少し和んだ様子だ。

「アナタ……やっぱり！！」

シンの顔を見てビビがそう問い詰める。

ウイスキーピークを出てからというもの、ビビはシンを見るたびに言ってくる。

だから……一体なんなんだ？

ビビは俺を誰かと勘違いしているようだが、俺は正真正銘初めてビビに会った。

だって俺は元々ONE PIECEの世界にいなかったのだから確実に人違いだ。

俺は毎回のようにビビに問われ続けたが、答えはいつも同じで「違うって……」と言う。

ビビが言うには、バロックワークスの情報を教えてくれた人に瓜二つらしい。

「そんなに似てるの？」

俺の横にいたナミがビビに尋ねる。

「ええ・・・本当にそつくりだわ」

ザッパーーーーン!!

俺たちがそんな話をしていると、船より少し離れた場所でイルカが跳ねた。

「おい、みんな見るよ！イルカだぜ」

サンジがそう言ったので、全員そのイルカを見る。

ナミも「わぁーかわいい」と言いながら視線をイルカに向けている。

ザッパーーーーン!!

イルカがもう一度跳ねると、船を簡単に跨いでいる。

うわぁ……………。

こんなにでかいんだ……………。

イルカは船の何倍もありそうな巨体だった。

「でかいわ……………」

ナミがそう叫ぶ。

「逃げる……………!!」

船長であるルフィの言葉に、俺たち麦わらの一味はそれぞれ船の操作をするために動き出す。

ビビはそれを驚いた様子で見っていたが、今はそんなことどうでもいい。

俺もやっと慣れてきた船の操作に必死で周りの様子を見ることが出来ない。

俺たちは拔群のチームワークでイルカの脅威から脱出する。

「島が見えてきたぞ！」

俺はそう言ってみんなに教えてあげる。

するとナミはログボースで何やら確認している。

「間違いない。私たちの次の目的地はあの島よ！」

確認を終えてナミがそう言つと、みんなはそれぞれ喜び、興奮しているようだ。

リトルガーデンか・・・。

俺もなんだか興奮していた。

リトルガーデンに上陸した俺たちはそれぞれ行動を起こした。

ルフィとビビ、カルーはこの島を冒険しに行った。

まあ、ビビはルフィについて行ったただけだが……………。

ゾロはどうやら散歩に行くようだ。

まだみんなはゾロの方向音痴に気付いてないらしい。

結局ゾロはサンジと狩り勝負することになり、二人ともいなくなっ
たってしまった。

「じゃー俺も散歩してくる」

残ったナミとウソップにそう言って船を下りる。

「ちょっと待って!!」

そう言って船を下りたのはナミだった。

どうやらウソップと二人で残るのは不安らしい。

またまた原作とは違う展開に戸惑った俺だが、特に断る理由もない
ので了承した。

ウソップはどうしてもこの島には上陸したくないらしい。
一人で船番するのも嫌だろうが、結局ウソップはメリー号に残った。

戦士たちの休息！？上陸リトルガーデン！！（後書き）

今回は少し短くなってしまいました。。

次回は少し長くなる・・・かも？

そのための小休憩だと思ってください。笑

手も足も出ない？ 麦わらの一味苦渋の決断！

リトルガーデンに上陸した俺は、ナミと一緒に深い森の中へと入っていく。

「それにしても不気味な森ねえ・・・」

「やっぱり船に戻って、みんなの帰りを待ってたほうが良かったんじゃない・・・」

俺がナミにそう言つと「船が襲われたら、私とウソップだけじゃ死んじゃうでしょ！ 私が！！」とか言っている。

じゃー一人で待つてるウソップは死んじゃうよ？

俺はそう思ったが、口には出さない。

とりあえず、この森を堪能したら船に戻るか・・・？
でも、もうウソップは船にはいないかもしれない。ブロギーと一緒にいるかもな。

俺は原作を思い出したので、もうウソップの心配はしないことにした。

ギャーース!!

「ギャーース!!!!」

な、なんだ!?

ナミの叫び声が聞こえたので振り向いてみると、ナミが上を指差して固まっている。

俺はナミが指差している方を向いた。

ギャーース!!!!

なんだあれ!!!!

俺たちの上空にいたのは、全長6mはありそうな巨大な鳥。いや、おそらく恐竜のプテラノドンだった。

ナミは今にも泣き出しそうな顔で俺を見ている。

なんとかしなさいってか？

仕方ない……。まあ、なんとかなるだろう。

俺たちを見つけたのか、プテラノドンは真っ直ぐ俺たち目掛けて突進してくる。

「散れ……。千本桜！」

ふう……。

大分千本桜の扱いにも慣れてきたな。

俺は一瞬でプテラノドンを切り刻んでしまった。

「前々から気になってたけど、その刀は一体何なの？」

恐怖から救われたナミが千本桜を見ながら言う。

んゝなんて答えよう。

結局俺は「俺にもわかんない」と言って誤魔化した。

「そんなわけないでしょ!!」

うん、ごめん。

誤魔化しきれなかった。

「やっぱりアンタも悪魔の実の能力者なのよね？」

「刺青を消したのも・・・」とナミが言ってきたので、「三つ目のお願いは？」と俺は言った。

「ああ！」

ナミはそう言った俺に「忘れてた」と言わんばかりに手を叩く。

それから、何も聞かないようにしようとしているナミを見て、俺はクスクス笑いながら森の奥へと進んで行く。

さてと、特に何も無かったな。

俺はそんなことを思いながら船に帰ろうとした時、信じられない光景を見てしまう。

「え？」

なんで．．．ここに．．．？

「人？」

ナミはそれを見て呟く。

俺たちの前に現れたのは、片手に本を持ちながらも俺たちを待っていたように座っている。

王下七武海の一角、暴君のバーソロミュー・くまだった。

「待っていたぞ．．．．奇術師．．いや、道化師クロセ・シン」

は？

待っていた？

てか何でこんな所にいるんだ？

俺はパニックになっていた。

そんな俺を知らずに「何？シンの知り合い？」とナミが聞いてくるが、俺は言葉を失ってしまってその問いに答えられない。

奇術師？

何を言ってるんだ？てか、何で俺を知ってる？

俺はいろんな疑問でいっぱいだったが、くまが立ち上がり手袋を脱ぎ出したので俺は警戒した。

「・・・ナミ、悪いけどみんなを呼んで来てくれないか？」

俺は震えた声でそう言う。

「ちょっと！どいうことか説明しなさいよ！！」

ナミはついていけないことに腹を立ち、シンに説明を求めた。

が、今はなんとなくそんな時間はない．．．．．と思う。

「こいつは王下七武海の一人だ」

「え？」

ナミは一瞬驚いた表情を見せたが、いろいろと察知してくれたのだろう。すぐに来た道を走って戻って行った。

「ルフィたちを連れて来るから、それまでなんとか持ちこたえて！」

ナミのその声がもう遠くで聞こえる。
足速いな．．．。

ナミを追いかけないところを見ると、やはり狙いは俺らしい。

「なんで俺を？」

俺は素直にくまに聞いた。

「お前は覚えていないかもしれないが、政府にとってお前は今以上に危険な存在。消せという指令が出ている」

だから全然意味わかんねえ。

政府？

危険な存在？

俺が覚えていないって何をだよ！

まさかこいつらもビビと一緒に、俺と誰かを間違えてるんじゃないかねえのか？

「そつかい。消せるもんなら消してみな！」

俺は考えるのがめんどくさくなり、くまを挑発する。

どうせ俺には大嘘憑オールフイクションきがあるんだから死なない。

この場を逃れるためには、文字通り死んだふりをするしかないだろう。

くまさん相手だしな！

もしくは．．．俺がくまに勝つことだ！

「散れ！！千本桜あああああ！！！」

俺は刀を鞘から抜いて千本桜を始解する。

「．．．無駄だ」

俺は始解と同時にくまに全ての刃を向かわせたが、全て肉球で弾かれた。

痛つてえ．．．。

弾かれた刃の半分以上が俺に跳ね返ってきて、自分を切り刻んでしまった。

「それが大嘘憑きと千本桜か．．．．聞いていた通りだ」
オールマイクシヨン

は？

何でこいつがその二つを知ってるんだ！？

クッソ．．．平常心．．．平常心．．．。

「へえ、俺のことを随分と知ってるようだな」

俺はそう言いながらくまに邪眼をかけようと．．．．かけようと．
．．．．。

てか、こいつの黒目はどこだよ！！
目合ってるのか???

俺は、一応邪眼を発動させようとしたが、おそろくかかっていない。

「お前のことは調べ上げている。邪眼も無意味だ」

マジかよ・・・。

マジで調べられてる??

どうやって・・・。

「旅行するなら どこへ行きたい？」

あーーーー、言われちゃったよ。

こうなりや奥の手だ！

トントントン・・・。

俺はいろんなことにパニックになって、はねるをしている。

「何をしている？」

くまはやはりというか、特に表情も変えずに俺を見ている。

うん。

なんか恥ずかしいわ！

もう俺にはこれしか出来ないか・・・。

「正・・・解！」

俺は正解でくまに立ち向かおうとするが、すぐに持っていた柄を弾かれてしまった。

「お前は死なない、だからもうこの世界に関われない場所に飛ばしてやる」

くまはそう言って俺に手を当てようとする。

へっ！

「オールフイクション大嘘憑き！！お前の悪魔の実を．．．無かったことにした！！」

俺は最後の抵抗でくまに触れてオールフイクション大嘘憑きを発動させる。

とりあえずこれでくまの力は半減だぜ！

ま、そのかわりルフィたちの修行や戦争編も出来ないが、変なところに飛ばされるのは嫌だからな。

結局、自分の身の安全が第一だぜ！

「それは無理だと、実証されている」

「！！？」

「もぉーアンタたち何やってんのよー!」

現在、ナミはみんなを連れてシンの所に向かっている。
どうやらルフィたちはバロックワークスと戦っていたようだ。

「しょうがねえくだろ？」

ルフィは走りながら弁解している。

「あれ？」

どうやら麦わらの一味は、先ほどまでシンがいた場所に到着したようだ。

「おいナミ！どこに七武海がいるんだよ？」

「シンもいないみたいだよナミさん」

みんなが不思議に思っている中で、ナミだけはある所を見つめている。

誰もいない森の真ん中でナミが見ていたのは、地面に刺さった一本の刀。

ルフィたちもそれに気付いて刀に近付く。

「これってシンの刀だよな？」

その刀を地面から引き抜いて、ゾロは言う。

「ま、まさかシンの野郎・・・」

ウソップはシンがやられてしまったのだと思い、慌てている。

「シンが簡単にやられるわけねえー！ーだろ！ー！！」

森中に響き渡る声で、ルフィはウソップに言った。

それから麦わらの一味は3日間シンを探したが、どこにもシンの姿はなかった。

シンを探してから4日目の朝、ナミが突然倒れてしまった。

熱が上がり続けて苦しそうなナミ。

みんなはそんなナミを心配そうに見つめる。

「このままでは危ないわ・・・」

そう言ったのはビビだった。

医者もいないこの森でナミを看病するのは難しいとのこと。

そこでサンジがアンラッキーズが落としたアラバスタへのエターナルポースを持っていたことによって、次の島・・・アラバスタには行く。

「ルフィ・・・ダメよ・・・シンは必ず生きてるわ・・・だからみんなで一緒に・・・」

ナミはそう言っただけで絶えてしまった。

「おいルフィ！どうすんだよ！このままじゃナミさんは・・・」

サンジはナミが心配でルフィを怒鳴りつける。

もちろん、サンジ以外のみんなもナミのことは心配だ。しかし、シンの行方も心配である。

それにナミの意思も・・・。

だからこそ船長であるルフィに判断が委ねられた。

今まで黙っていたルフィが口を開く。

「シンは簡単に死ぬ奴じゃねえ．．．。俺はそう信じてる。
だから今はナミを助ける！そして、後でナミにみんなで怒られるん
だ！」

そしてシンを欠いた麦わらの一味は、ドリーとブロギーに「シンを
見かけたらこれを．．．」と言ってメッセージを預けた。

「出港だああああー！！！！！」

ルフィの掛け声とともに、ゴーイングメリー号はリトルガーデンを
出港した。

手も足も出ない？麦わらの一味苦渋の決断！（後書き）

さて、シンが麦わらの一味を離脱してしまいましたね。泣

シンはどこへ行ったのか・・・そしてまたルフィたちと再会出来るのでしょうか？

千本桜はもちろん、メリー号に保管しましたがけど・・・。

シンの唯一の攻撃方法が無くなってしまったのも、シンにとっては大きいですね。

それでは次章、またお会いいたしましょう！！

絶望の島に到着？確信したシンの正体！

（聖地マリージョア）

「バーソロミュー・くま様が戻られました！」

あれから数日後、くまは元帥であるセンゴクに会いに来ていた。

「やはり同一人物だったか・・・」

「・・・・・・・・」

どうやら二人はシンのことについて話しているらしい。

「指示通りの場所に飛ばしてくれたんだろうな？」

「もちろんだ」

「だ、誰？」

深い眠りから覚めて言った言葉はそれだった。

「そ、そうだ！シンは？？」

ナミはトナカイであるチョッパーを見ても、気になるのはシンの事だった。

しかし、ここはリトルガーデンでもメリー号の中でもなさそうだ。
ルフィとサンジくんに連れて来られたのは覚えている。
という事は、シンを無事に見つけて出港したのだろう。

ナミはそう考えて安心し、また布団の中に入った。

ドウンー!!!

クッソ……。

「ここは一体どこなんだ？」

くまに飛ばされたシンは数日間空の旅をして、見知らぬ所に降り立った。

周りは森か．．．．。

見る限りかなり広い森のようだ。

グウウウウウウウウ。

ん？

シンが音のした方を振り向くと、そこには巨大なイノシシがいた。

めんどくせえな。

千本桜で細切れにしてやろつか？

あ？

千本桜が無えじゃねえーーーーか!!

ギャーーーーー!!!!!!

千本桜が無い事に気づき、イノシシを倒す方法が無いシンはひたすら逃げていた。

こんなところで邪眼を使うわけにはいかない。

何故なら、この先また何かに襲われた時に使えないということが起これば困るからである。

一日三回しか使えないからな……。無駄に使うわけにはいかない！

オールマイクシヨン
大嘘憑きで邪眼のリスクを無かったこととしてみるか？

いやいやいや！！

出来るかどうか分からないのに、そんなことをするのは危険すぎる！

死ぬことは無かったことに出来ても、自らの消滅は無かったことに出来ないかもしれない。

オールマイクシヨン
大嘘憑きが万能じゃないことはめだかボックスの原作を思い出せばわかる。

球磨川は江迎の過負荷マイナスを無かったことには出来なかった。そして俺もくまのニキュニキュの実の能力を無かったことには出来なかった。

くまにとってニキュニキュの実は自身にとっては大切なものってことだろうか？

それは良いとして、出来るかわかんないことで試すのは危険すぎるってことだ。

これで消滅してしまったらマジで笑えない。

確認も出来ないんだから、確実性のないことはやるべきではないのだ。

まったく！意外と大嘘憑オールフイクションきって使いづらんだよなあ。

ま、今は死なないってことだけで十分にチートな能力だ。

てか、俺はいつまでこのイノシシに追いかけられるんだよ！！

はあ．．．はあ．．．。

ん？

イノシシがない？

いつからいないのかわからないけど、どうやらもう追ってきてはいないようである。

とりあえずこの疲れを無かったことにするか・・・。

大分走ってきたけど・・・。
あそこにあるのって村だよな？

シンの目にはまだ遠くであるが、村らしきものが見えていた。

え・・・？

あれってもしかして！！

シンが見ているのは、森と岩山に囲まれている村。

家の屋根には蛇の置物のようなものが置いてあった。

やっぱり・・・。
間違いない。

女ヶ島のアマゾン・リリー！！

そうか・・・。

くまは俺にもうこの世界に関われない場所と言っていた。

なるほどね。

確かにカームベルト風の帯に囲まれているこの島なら脱出するのは難しい。

男嫌いのハンコックに頼むしか方法は無いが、それはもっと難しいだろう。

ルフィはハンコックに気に入られることが出来たが・・・。
あれは天竜人の件とかいろいろあったからなあ。

可能性があるとすれば・・・オールフイクション大嘘憑きでハンコックたちの奴隷の証である刺青を消すこと。

しかし、俺の言うことを信じて背中をあずけてくれるわけないし、最悪話も聞いてくれないだろう。

俺がハンコックに気に入られるなんて皆無!!

無理な話だよなあ。

ん〜どうするか・・・。

「あ
」

え？

マ・・・マーガレット!!？

なんでこんな所に??

シンがどうするか考えている間に、マーガレットに見つかってしまった。

最悪だ・・・。

シンが見つかったことにショックを受けて固まっていると、マーガレットは口を開いた。

絶望の島に到着？確信したシンの正体！（後書き）

何故政府はシンのことを知ってるんでしょうかね？

まあそれは後々・・・。

てか、書き始めてから結構書きましたね！
この物語はどうですか？

感想・評価・批評などいただけたら嬉しいです

よろしくお願いします！！

語られた真実の一部！！2億8000万の男？

「うるせえ！！いっつー！！」

トナカイであり医者であるチョッパーにルフィがそう叫んでから数時間が経過しようとしていた。

その数時間の間に、麦わらの一味に船医としてチョッパーが加入し、ゴイングメリー号はドラム島を出港した。

「どうしてシンを置いて来たの！？」

その間にナミがそのことで一味を怒鳴りつけたの言うまでもない。

「シンって誰なんだ？」

新しく一味に入ったチョッパーがそう言う。

その言葉に反応したのはウソップだった。

ウソップは、チョッパーにシンがこの一味の副船長であると説明し、リトルガーデンでの出来事やそれ以前の話もしてあげていた。

ナミもみんなの説明でようやく理解し、シンがまた帰ってくることを願っていた。

そして麦わらの一味は、アラバスタに向けて船を進める。

その頃、アマゾン・リリーに飛ばされてしまったシンはマーガレットによって村に連れて来られ、現在シンはわけもわからぬままに蛇姫と言われているボア・ハンコックのいる天守閣にいる。

どういうことだ？

シンがそう思うのも無理はない。
それは、マーガレットに会った時のこと……………。

「あ」

え？

イノシシに追いかけられてたどり着いた村の近くの森でマーガレットに見つかってしまったシン。
やばいと思って逃げようとしたシンに対して口を開いたマーガレットの言葉は……………。

「もしかして……………いや、やっぱりシンだね？」

シンのことをまるで知っているかのように話すマーガレット。

それから「久しぶりだね」「生きてて良かった」などと話してくる。

「そうだ！みんなに知らせなきゃ！！蛇姫様にも・・・」

そう言ったマーガレットはシンの手を掴んで走り出した。

その時のマーガレットの顔はとても嬉しそうで、笑顔に満ち溢れているのをシンは見ていた。

そして今、シンは天守閣にてハンコックが来るのを待っている。
シンの横にはマーガレットやニヨン婆もいる。

「シン！！」

走って来たのだろう。現れたハンコックは息を切らして登場した。

しかし、その姿は海賊女帝とは思えないほど滑稽な姿。

だが、世界一の美しさと言われているのは一瞬見ただけでわかった。

シンが顔を赤くしてハンコックを見ると、ハンコックも何やら恥ずかしがっているのか、柱の影に隠れてチラチラとシンの方を見ている。

か、かわいい・・・！！

ハンコックに見とれてその後の話など聞いてなかったシンだが、冷静に考えてみるとこの展開にシンは戸惑うばかりで、気がつくと宴が始まっていた。

何故俺の事を知っているのか、そしてこの歓迎ムードは一体……。

俺は疑問に思っていることを全て話した。
話している間、ハンコックが徐々に悲しい顔になっている。

いや、それはハンコックだけではないようだった。

「やはりか……」

全てを話した俺に対して、ニヨン婆が口を開いた。

「おそらくお主は^{オールフィクション}大嘘憑きとかいう力で記憶を失ったということに
ゆら」

「は？」

「やはり・・・そうであったか」

ニヨン婆の推測に対して、ハンコックも何か納得したように呟いた。

何を言ってるんだ？とシンが口にしようとした時、ニヨン婆がどこか遠くを見つめるような目で語り出した。

「あれは・・・今からちょうど2年ほど前じゃったかによ？」

「急に何を・・・」

「いいから黙って聞くにゆら!!」

何なんだよ・・・。

（2年前）

「これは……!!」

ニヨン婆は、九蛇海賊団が遠征するたびに外海から持ってくる新聞を読んで驚いた声を上げる。

そこに書かれていたのは、天竜人に手をかけた海賊の記事。

×年 月 日。

グランドライン
偉大なる海シヨボンディ諸島にて、天竜人が海賊に襲われるという事件が発生した。

犯人は指名手配中の海賊、奇術師クロセ・シンイチ（手配額1億2500万ベリー）率いるジョーカー海賊団で、現在の行方は不明とされている。

この事件で政府はクロセ・シンイチの手配額を1億2500万ベリーから2億8000万ベリーに引き上げて、現在も搜索中とのこと。

なお、現在も……
以下略。

「まさかそんなにやことをするにやつがまだおるとは思わなかったに
よ」

俺は前にもこの世界にいたということか？

全ての話を聞いた俺の頭は混乱していた。

そんな中、話を終えたニヨン婆がお茶を飲み始める。

ニヨン婆の話からでは、俺が2年前にこのアマゾン・リリーを訪れたこととそこからアマゾン・リリーから違う所に行くまでのこと、そしてその新聞で書かれていたことしかわからなかった。

この話を簡単にすると・・・。

2年前の俺は一人でこのアマゾン・リリーに来たようだ。
しかし、新聞と俺の話では少なくとも7人の仲間がいたらしい。

俺がいなくなつてからの2年でその仲間たちは、それぞれ海賊団を結成したり、行方を暗ませたというニュースもあつたらしいが、ニヨン婆たちは一人を除いてシンの海賊団のメンバーが誰なのか知らないらしい。

そして俺はこの島でハンコックたちの奴隷の証の烙印を大嘘憑きでオルフィクション消し、数日間この島に留まったのちに会いたい奴がいるんだと言って、この島を離れた……か。

「そして最近になってお主が死んだということを政府から聞いて、わらわは凄く心配したのだぞ！」

ニヨン婆の話を聞いて黙っていた俺に、ハンコックが遠くからそう言ってきた。

この話が本当なら、俺は誰かに会いに行って記憶を失ったということになる。

でも、本当に大嘘憑きで記憶を消したのなら、その記憶を取り戻す方法はない。オルフィクション

だが、今までの疑問がこれで無くなった。

少なくとも俺は、ノジコ、スモーカー、ビビに会っていたということだろう。

この三人は俺のことを知っているようだったし……。

まあ、そんなことを今考えてもしょうがないか！
俺はどうしたって記憶を取り戻すことは出来ないわけだし……。

それよりも、ルフィたちは今どこにいるかの気がなるよ。

「シン！」

「なんだ？ハンコック？？」

「はうっ／＼／」

ハンコックが俺の名前を呼んだので返事をしたのだが……。

この反応は……。

もしかして俺に惚れてるのか？

原作でのルフィに対しての反応と一緒にだ。

2年前の俺よ……一体何をしたんだ？
烙印消したのがよほど好印象だったのかな？

いや、2年前の俺よ!!

良くやった――――!!

お、落ち着け俺……。

「で?どうしたんだ?」

俺がまたハンコックに聞くと、何やらハンコックがモジモジしだした。

めっちゃかわいい――!!

「え……と……」

ん?

何だい?

「シンは覚えておらぬかもしれないが．．．実は2年前にシンとわらわは．．．．その．．．結婚したのじゃ／＼／／」

なんだって――――！！！！

「おいおい、蛇姫よ．．．。嘘をついたらいかんによ！」

ニヨン婆が冷静にそう言った。

嘘かよ――！！

でも最高じゃねーか！！

つまり俺が了承すれば、すぐにでもハンコックと結婚できるってか――？？

よっしゃー！！！！

でもなあ．．．．。

ぶっちゃけナミとか他の人とも．．．。

シンは「ん」と悩んでいた。

「シンはわらわと結婚するのは嫌か？」

ハンコックは悩んでいる俺にそう聞いてきた。

「嫌ではないぞ？」

俺は正直にそう答える。

「はうつ／＼／／」

それからハンコックは3日間寝込むことになった。

語られた真実の一部!! 2億8000万の男? (後書き)

果たしてシンはハンコックと結婚するのか?

それは次章のお楽しみ!

それにしてもようやくシンの秘密の一部が明かされましたね。
7人の仲間というのも、原作に登場している人物たちです!

ここからが本編!! 笑

驚愕の真実？シンの仲間の方

「本当に記憶を無かったことにしたんだな」

ハンコックが寝込んでから3日が経った。

その間、ニヨン婆からいろいろ聞いた俺は、疲れたので外の空気を吸いに来ていた。

そんな俺のところに、マーガレットがやって来た。

「実感はないんだけどね……」

そう言いながらボーっと空を見上げる。

そう。

未だに実感が無い。

いきなりいろんな話をされて戸惑っているのだ。

（俺は誰に会いに行こうとしたのだろうか？）

辿りようのない記憶を思い出そうとしている。

考えても仕方ないのに・・・。

そんな俺の思いを感じ取ったのか、マーガレットも空を見上げて言った。

「きっとシンは会いたい人に会えたと思うよ？」

「え？何か知ってるのか？」

シンは突然そんなことを言われたので、キャラを忘れて叫んでしまった。

「ははっ！私はシンが誰に会いたかったのは知らないんだけど・・・。
。シンが記憶を失う前のことは良く知ってるよ？」

「そ、そうなのか？」

良く知っている・・・？

何で？

俺はそう思ったが、そんな疑問はすぐに吹っ飛ばされた。

「私はお前と一緒にずっと旅をしてたからね！」

「ふえ？」

おっと、変な声を出してしまった……。

って……！！

「じゃーマーガレットは俺の仲間……だった？」

衝撃の事実。

しかしマーガレットは冷静に「うん」と言った。

ええええええええええええ！！？

ど、ど、どゆこと……？

「やっぱりシンはそっちのが“らしい”ね」

マーガレットがくすくす笑いながら俺を見ている。

か、かわいいな・・・。

おっと・・・びっくりしすぎて変なポーズになってしまった。

でも俺らしい？

なんか・・・ショックだ・・・。

前にいた俺は素でこの世界で過ごしていたということか？

「どうしたの？」

今はそっとしておいてくれマーガレット・・・なんとなく後悔してるだけだからさ。

「おほん！マーガレットが仲間だったのなら、ほかの仲間のこともわかるってことだね？」

復活した俺は、マーガレットに聞きたいことを全部聞こうと思った。

まずはやっぱりこの質問だろ！

「みんなが今何してるかは知らないんだけど……………」

オホホホホホホ。

マジでか!!？

マーガレットから仲間だった奴らの名前を聞いた俺はテンションが上がってしまった。

その後も、マーガレットが俺の仲間になった経緯や俺がどんなことをしていたのかも聞いた。

そして……俺の海賊団が解散した理由も……。

「マーガレットは狙撃手だったんだな」

全てを聞いた俺はそう呟く。

「いや、シンが勝手にそう言っていただけだ」

え？そうなの？

マーガレットとのそんなやり取りを楽しんでいると、どうやらハン

コックが目を覚ましたようで、俺たちはハンコックのところに向かった。

その道中……。

「シンはやっぱり蛇姫様と結婚するのか？」

マーガレットが歩きながらそんなことを聞いてきた。

「蛇姫様はとても美しいからね……。」

「美しいからって結婚するわけじゃないだろ？」

まあ、正直ハンコックと結婚出来るなら最高なんだろうけど、俺は少しだけ迷っていたのでそう言う。

「そ、そうなのか？」

マーガレットは何故か嬉しそうに笑顔を俺に向けた。

もしかして．．．．．やばい！！

ハーレム作れるじゃん！！

そんな淫らな考えも浮かんでしまう。

だつてねえ？

これはそういうことでしょ？？

誰に言ってるのかはわからないが、神様に貰ったリトの【ハーレム体質】に感謝した。

やっべえー、どうしよう．．．。

そんなことを思いながら、シンはハンコックの下へ行く。

シンがアマゾン・リリーでマーガレットから驚愕の事実を聞かされていた頃……。

「必殺!!ウソツチョ……ハンマー彗星!!」

ガンッ!!

ウソップとチョッパーの連携技によってMr.4および、ミス・メリークリスマスを倒していた。

ドッカーーン!!

「はぁ……はぁ……シンがいれば……」

「え？シンって奴はそんなに強いのか？」

ウソップがなぎげに呟いた一言にチョッパーが反応した。

「いや．．．俺もよくわかんねんだけど、ルフィとゾロでも勝てなかったらしい」

「えー！？そうなのか？シンって奴は凄いな」

事実とは少し違うのだが、チョッパーはシンに早く会いたくなった．．．らしい。

「ウオー仔牛肉ショット！！」

「ボンバルディエ爆撃白鳥アラベスク！！」

ドオーン！！

「また骨を．．．何本か逝ったな．．．コリャ」

（つたく、シンの奴早く来いってんだ）

ボンクレーを倒したサンジは、そう思いながらその場を去った。

「トルネード！！テンポ！！」

グルグルグル．．．。

ナミはウソップに作ってもらった天候棒クリマ・タクトでミス・ダブルフィンガーと戦っていた。

そして、宴会芸とも言える技の数々を豊富な知識で応用し、最後の攻撃を喰らわせた。

ドゴーーーーン!!

「はあ．．．はあ．．．」

（勝ったわよ．．．シン!!）

勝利したナミは天に向かって拳を突き上げた。

「一刀流居合い．．．．．獅子歌歌^{ししそんぞん}．．．」

スパスパの実の能力者、刃物人間であるMr．1を相手に苦戦していたゾロは、鉄を斬るための呼吸をこの戦いで身につけようとしていた。

「アトミックスパート!!」

ゾロにとどめを刺そうとMr・1がゾロに襲いかかった。

ズバッ!!

そして、ゾロの獅子歌歌ししんそんが、Mr・1を地に伏せさせた。

「・・・礼を言う」

（俺はアイツよりも強くなる!）

それぞれの戦いを終え、麦わらの一味はこの内乱を止めるために動き出した。

驚愕の真実？シンの仲間の行方（後書き）

シンがいない間にアラバスタが終わりそうです（＜＞）

果たしてシンは間に合うのでしょうか？

まだ麦わらの一味とは少ししか関わっていないのに、麦わらの一味にとっては大事な存在。

やはり、仲間だからでしょう！笑

自信の秘策？4人の七武海

俺の一言によって何日を寝込むことになったハンコックが目覚めたというので、俺とマーガレットはハンコックがいる部屋に入った。

部屋の中にいたハンコックは特に部屋着なわけでもなく、いつもと同じように綺麗な格好でサロメに座っている。

「もう大丈夫なのか？」

優雅に座っているハンコックにそう聞く。

しかし俺が話しかけると、またモジモジしだした。顔も凄く赤くなっているのが遠めから見てもわかるほどだ。

「だ、大丈夫じゃ．．．．しかしそんなに見つめられると、わらは．．．．」

そんなに見つめているわけではないと思うが．．．やはり恋するハンコックからすればそう見えるのだろう。

それから少しの間、俺たちはマリーゴールドやサンダーソニアを加えているんな話をした。

主に俺がルフィたちのことについて話していたのだが、ナミやビビの話になるとハンコックはほとんど無表情になっていた。

うん。

これからハンコックの前では女性の話は止めておこう。

そう思ったシンだった。

そんな他愛の無い話をしていると、バンッという音とともに部屋の扉が開かれた。

「蛇姫様！！大変です！」

天守閣に響き渡るような声を出して部屋に入ってきたのは、確かラッって名前の女の子。

原作でニヨン婆に新聞を渡していたり、子どもに蛇姫・・・ハンコックたちゴルゴン三姉妹の湯浴みの秘密を教えていたりした人物だ。

「なんじゃ、騒々しい!!」

今まで楽しい会話で盛り上がっていたところに突然やってきたからなのか、ハンコックは少し不機嫌な態度で言う。

しかしランは、「申し訳ありません」と言うとすぐに話し出す。

「政府より七武海の緊急招集が発令されたそうで……」

そこまで言うと、ランは一度ハンコックの顔を見た。

「わらわは行かぬ!」

この会話から察するに、おそらくルフィたちのこと……クロコダイルの件か？

もし、もし仮にだ。

ルフィたちがもうアラバスタでクロコダイルを倒していたら、この召集は原作で描かれていたくまとドフラミンゴが初登場する時のストーリー。

これは．．．．．賭けだ！

「ハンコック！俺の話を聞いてくれ！」

「．．．．．？」

「／／／！？」

いきなり話に入ってきたシンに、マーガレットもハンコックも首を傾げてシンを見た。

「どうしましうイガラムさん！すぐに彼らに伝えねば！」

「ああ、もちろんだ。しかし、これは大変なことになってきた．．．
。無事にこの島を出られると良いのだが．．．なんという手回しの早さ」

ルフイたちの活躍によって平和が訪れた国、アラバスタ王国。

その王国の宮殿内の暗い部屋で、イガラムとチャカが何やら話をしている。

「しかしこの彼は．．．．？」

一枚の紙を見て、チャカがイガラムにそう問う。

「そういえば……何故彼がいないのだ!？」

イガラムは今さらながら不思議に思った。

今回、彼はこの戦いに参加していない。現にこの宮殿内にも、あれからルフィくんたちと一緒にいるところも見えない。

しかしこれは……? ?

モンキー・D・ルフィ
(麦わら)

懸賞金：1億ベリー

ロロノア・ゾロ

（海賊狩り）

懸賞金：6000万ベリ

そして……………。

クロセ・シンイチ

（道化師）

懸賞金：2億8000万ベリ

イガラムたちの目の前には、この3枚の手配書がテーブルの上に置かれていた。

（とりあえずこのことを彼らに知らせなくては！！）

そう思ったイガラムは、すぐに彼らの下へ走り出す。

はあ．．．はあ．．．はあ．．．

「大変ですぞー！ー！！」

バンツ！！

「！？」

勢いよく扉を開たイガラム。

そこにはビビとカルーの姿しかなかった。

「ビビ様、彼らは．．．？」

息を切らしながら言う。

「なあに．．．イガラム。そんなに慌てて」

椅子に座っていたビビがそう言った。

「ルフィくんたちはどこへ？」

「海よ．．．海賊だもん」

「なんと．．．」

イガラムはその事実を聞いて力が抜けたのか、持ってきていた手配書を地面に落とした。

しかし、今まで何故か冷静に話していたビビが、その手配書を見て驚いた。

「シン．．．さん．．．？」

涙が溢れそうになる。

彼はみんなが信じていたように生きていたのだ。

懸賞金が高いことにも驚いたが、それは彼が何かしたに違いない・
・何よりも生きている証拠だと思った。

ルフィさんたちは、自分の手配書を見ても喜ぶだけで何も変わらないと思うが・・・。

「・・・う・・・これだけは・・・みんなに・・・ぐすつ
・・・見せてあげたかった・・・」

麦わらの一味に入れば、きっとまたシンさんに会える。

ビビはこの日、泣きながら必死に考えていた。

そしてここは、聖地マリージョア。

『海軍本部からマリージョアへ。王下七武海、ドンキホーテ・ドフラミンゴ様、次いでバーソロミュー・くま様、そしてボア・ハンコック様がお着きになりました』

(・・・シン)

「お前が来るなんてめずらしいじゃねえか」

「・・・わらわに気安く話しかけるな」

「おーおー、恐いねえ」

「・・・」

そして、後に来たジュラキュール・ミホークを加えて海軍と王下七武海の4人のメンバーでの会議が始まった。

自信の秘策？4人の七武海（後書き）

0時更新が続いてますが・・・。

あと5分しかない（＜＞）

ギリギリ間に合って良かったです！！

賭けの代償？ピンチに訪れた仲間の姿

「蛇姫様は大丈夫かしら？」

俺は今、九蛇海賊団の船の中にいる。

政府に呼ばれたハンコックについて来たのだ。

この船にいるのは九蛇海賊団のメンバーと、マーガレット、スィートピー、アフエランドラたちアマゾン・リリーの護国の戦士の姿もちらほら窺える。

先ほどハンコックの心配をしていたのはアフエランドラである。

もちろん心配しているのはアフエランドラだけではない。俺も含め、この船にいる者全員がハンコックの心配をしていた。

それは俺の一言から始まったのだが……。

「ハンコック！俺の話を聞いてくれ！」

俺の突然の言葉に、ハンコックは頬を赤らめて首を傾げる。

どうやら俺の次の言葉を待っているようだ。

「その収集に応じてくれないか？」

「シンがそう言うのなら．．．．／／」

え？

普通もつとなんかあるんじゃないの！？

せめて「なぜじゃ？」とか、俺が言う言葉に説明はいらない感じ？？

いや、まあ了解承してくれたのは俺にとってはベストなだけださ．．．。

結局その後、ハンコックにしてもらったことを説明することになったのだが．．．。

俺の頼みは一つ。

おそらくこの収集に承諾し、このマリージョアに来るであろうバーソロミュー・くまと話をする事。

そのために、ハンコックにはくまにそのことを伝えてもらい、海軍に見つからない所に来てもらうように伝えてほしいとお願いした。

そのことをハンコックに話したら、さすがに理由を聞かれた。

俺が「麦わらの一味に戻りたいから」と言うと、ハンコックは俺を止めようという言ってきたが、「また必ずハンコックに会いに行く」と伝えると渋々俺の願いを聞いてくれた。

マーガレットたちがついてきたのは、その話を聞いていたマーガレットが千本桜を持っていない俺を心配して同乗したということだ。

結局、スイートピーやアフエランドラたちもついて来ることになったのはマーガレットがみんなに話してくれたからだろうということはずぐに気がついた。

マーガレットが千本桜の存在を知っていたことについても聞いてみたが、やはりというか・・・記憶がなくなる前の俺も使っていたかららしい。

オイルフィクション
大嘘憑き、千本桜、そして邪眼の存在も知っていた。

そして、あと2つ使っていた力のことも聞いて、俺は「なるほど!」
と思った。

もしかして神様は前の俺と同じ力にしている?

ルーレットもランダムではなくて神様が操作している可能性もある
のではないか?

2つの内の1つはもう持っている力だったので確信はないけど、俺
はそう推理した。

（ってことはマーガレットが言っていた2つ目の力はいつか・・・
）

その力を聞いた時、今後絶対に必要になるだろうと思った。

「・・・!!」

俺がそんなことを考えている間にハンコックが帰ってきた。

周りはハンコックに声をかけているのだが、ハンコックは一直線に俺の方に来た。

「シン、わらわ頑張ったぞ！」

笑顔でそう言ってきた。

どうやら俺の作戦は成功しそうだ。

それからすぐに船を出してマリージョアを離れた俺たちは、近くの無人島に船を停泊させてくまが来るのを待つ。

「シン……………」

停泊してすぐにマーガレットが俺に話しかけてきた。

「!？」

俺とマーガレットが話して少ししてから現れたくまに俺は近付いた。

「よお…………俺が何故お前を呼んだかわかるよな？」

「…………断った場合、どうする?」

やっぱり渋ってきたか。

まあ、簡単に了承するなら俺を飛ばしたりはしないだろう。
政府の命令だったから…………というのもあるかもしれないが。

「お前が反乱軍だということを政府に話す!」

この会話は予想の範囲だったので、俺はすぐに言った。

「…………なるほど、了承した!」

意外に素直…………というか、こんなにあっさりでいいのか?

「ただし、一つ条件がある」

あゝ、なるほどね。

「・・・聞こう」

「俺の代わりに殺してほしい者がいる」

「！！？」

まさかそんな条件とはな・・・。

「名前は？」

「・・・×××××だ」

「！！！」

その名前を聞いて、俺はいくつかの疑問が浮かび上がった。
でも、今はそれしかない。

「わかった。でも、今すぐにつてわけじゃないんだろ？」

「いつでも構わない」

この会話の後、俺はハンコックや九蛇の人たちにお別れの挨拶をした。

また必ずアマゾン・リリーに行くと約束をして……。

「シン……わらは待っているからな！」

「ありがとう。またね！」

俺はそう言いながら、ハンコックの頭に手を置いた。

「／／／／／」

やっぱり背がでかいな……。

（これが……婚約／／／／／）

俺とハンコックの思いは違う。

「じゃゝみんな、またね!!」

現在、アラバスタを出港した麦わらの一味は海軍に追われていた。
出港したと言っても船を出しただけで、ビビとの約束の場所に向か
っている最中なのだが……。

そんな中、海軍の猛攻を受けている麦わらの一味。

「こんなときになにしてんだよゾロ!？」

ゾロの行動を見て言ったのはウソップである。

「いや．．．．シンの刀がよ．．．」

シンの千本桜を見ていたゾロが言った。

「いやいや、そんな場合じゃねーだろ!！」

確かにそんなことをしている暇はないはずだが、ゾロはシンの刀でこの状況を切り開きたかったようだ。

「この刀身消えねえんだよ」

ボソッとそんなことを言う。

ウソップやサンジは何言ってたんだ!？という表情である。

その時．．．。

「少しだけ、冒険をしました」

「ビビィー!!」

嬉しそうな声を上げて、ルフイたちは船を戻そうとする。

しかし海軍の砲撃によって、なかなか近づけない。

「私も．．．みんなと一緒に．．．」

どうやら原作とは違い、ビビは仲間になることを選んだようだ。
これもシンの存在があったからなのか．．．？

だが、海軍のせいで船を近づけることも出来ない。

「ど、どうしようカルー？」

「ク、クエ．．．」

「いいの？」

「もちろん！！」

ヒュッ。

ドーーーーン！！

ヒュンッ。

ドーーーーン！！！！

突然海軍の軍艦が破壊されていく。

「え？・・・な、何？？」

ビビもルフィたちも、突然の事に驚いた。

「俺たちの仲間になるって？」

背後から聞こえた声。

聞き覚えのある声にビビはゆっくりと振り向いた。

「シ、シンさん．．．？」

「やあ。」

そこにいたのは紛れもなくシンの姿。

そして見知らぬ女の人が蛇を弓のように持ち、海軍船を狙って構えている。

「海軍も突然のことで慌てている。今の内に行くよ、マーガレット！」

「うん！急ごう！！」

隣にいた女性はマーガレットという名前のようだ。

（だ、誰？）

あはは。

マーガレットを見て戸惑ってるなビビ。

俺はそんなことを思いながらビビを担ぎ上げた。

「え．．．？シンさん！？」

ビビが何やら慌てているようだが、俺はそんなことお構い無しにビビをカルーに乗せてマーガレットと一緒に担いで走り出す。

「カルー！ちよつと我慢出来るか？」

「クエーーーーーッ！！」

そのカルーの叫びを肯定ととった俺は、マーガレットとアイコンタクトをして海に飛び出した。

その空中の間に、マーガレットもカルーの上に乗って、それを俺はカルーごと担いだ。

「．．．．お、重．．．．じゃない」

あ、あぶねーーーー！

それはさすがに失礼だろ俺！

海に飛び込んだ俺たち．．．．．いや、俺の脚は海を弾いた。

2年後サンジの技の名前をパクらせてもらっぜー!!

これがマーガレットから聞いた4つ目の力『はねる』の真骨頂!!

ブルースブラッシュ
「海跳ね!!」

俺はそう叫ぶと海の上を脚で弾くように跳ねながら、徐々にゴースグメリー号に近付いていく。

トンッ!

そして無事にメリー号に乗った。

「ただいま、みんな!!」

「シン――!!」

「クエ――!!」

俺がそう言つと、みんなは俺の名前を叫びながら抱きついてきた。

ゾロ・・・空気よんでお前も来いよな。

おっ！

チョッパもいる！！

はは、やっぱり初対面で抱きつくことはしないか・・・。

ドーーーーン！！

「！？」

「シン、とりあえずここを抜けよう！」

マーガレットが海軍船に向けて覇気を纏わせた矢を放ちながら言う。

「誰だ！！この美女はーーーー！！？」

さすがサンジ・・・。

もう俺から離れてマーガレットに言い寄っている。

「・・・ぐすつ・・・話を聞くのは後よルフィ!」

ナミが泣きながらルフィに言った。

「よーし!! みんな揃ったし・・・出港だあああああ
ああ!!」

世界に届く吉報！生きていた船長？

グランドライン
偉大なる航路のとある島。

「キャプテン！！これ見て！」

そう言つて手配書を見せる。

「これは．．．！船長とマーガレット！？」

シンとマーガレットの手配書を見て驚く男。

「麦わらの一味．．．．．知らねえ海賊だな．．．」

「どつする？」

「今は同じ場所にいるんだ．．．．．きっとまた会えるさ．．．．．」

そしてとある海賊船では、暗い部屋でシンたちの手配書を見ている女。

「マーガレット！！あのヤロー、なんでまたシンと一緒にっ！！」

その者はマーガレットの手配書をくしゃくしゃ丸めた。

「何してるんだ？」

そこに入ってきた男がそう言う。

しかし女は不機嫌な態度で男を追い返した。

「キーーーーッ！！私も早く会いたいよ・・・シン・・・」

暗い部屋で響き渡った嘆きの言葉だった。

「おーーーーい！」

ガヤガヤした街の中で、一人の男を呼ぶ声がした。

「あーーーー！！？うるせえんだよ！何か用か？」

その声に反応した奴は誰かに追われながらも反応する。

「これってお前がいた船の船長さんじゃねーのか？」

そう言っただけで持っていた手配書をその男に投げ渡す。

それを見た男は手配書を見て笑う。

「やっぱ生きてたか！シン！！」

喜んだのもつかの間、男はそのまま誰かに追いかけて、街のどこかに消えていった。

そして東の海でも、この手配書は出回った。
イーストブルー

その海で一人用の船らしきものに乗る女。
その腰には一本の刀が携えられていた。

「シン．．．麦わらの一味？？」

その手配書を見て微笑む女。

「私も．．．また偉大なる航路に行かないとね！！」
グランドライン

そう言って船を進めた。

その頃、麦わらの一味は海軍の追撃をなんとか振り切り、次の島へと船を進めている。

そんな中で船内はとても騒がしい。それもそうだろう・・・ビビ、カルーの仲間入りにシンが“仲間”を連れて帰還したのだ。

船では宴状態である。

シンは今まで会ったこと、マーガレットのことと女ヶ島のこともみんなに話した。

その流れでマーガレットも麦わらの一味に入ることになり、自己紹介も済ませた。

まあ、一番喜んでいたのは、サンジだったが・・・。

ちなみにシンは、自分の力のことも一部を除いて一味に話した。

オイルフィクション
大嘘憑き、邪眼、そしてはねる。
はねるははねるとしてではなく、海跳ねとして話したのだが・・・。

もちろん千本桜のことも話した。
リトルガーデンに置いて来たので諦めようと思ったが、ゾロに「ほらよ!」と言って渡された。

ゾロは「ナミに感謝しろよ?」と言っていたので、あの後ナミが拾ってくれたのだろう。

千本桜のことはその時話した。

例によって「不思議な刀」で千本桜の力を話し、大嘘憑きや邪眼のことは生まれつきで、悪魔の実ではないと説明した。

この説明をした時にみんなの頭には？が浮かんでいたが、さすがは麦わらの一味。

すでにそのことは忘れて宴をやっている。

ナミは刺青のことを思い出してお礼を言ってきたが・・・それ以上のことは聞かなかった。

「シンが戻ってきただけで良い」と言ってくれた時はかなり嬉しかった。

宴の途中でビビがみんなの懸賞金について話したことは、さらに宴を盛り上げた。

しかし、サンジはゾロに負けたことでショックを受けていた。

ルフィも何か反応するのかもしれないと思ったが、「やっぱりシンはすごいなあ!!!」と言って笑っていた。

そういえばルフィって、俺と会った時に副船長にするって決めてたんだよね？

俺の記憶ではココヤシ村で会ったのが初めてだが．．．アマゾン・リリーで記憶前のことについて知ったので、もしかしてその頃に会ってるのかもしれない．．．？俺はそんなことを考えるようになった。

あれ？

そういえば．．．．．。

キイイイ．．．．．。

俺が何かの異変に気付くと同時に船のドアが開かれた。

「騒がしいと思ったら、何だか楽しそうね？」

そう言ってドアから出てくる一人の女性。

あっ！

そうかロビン！

俺はすっかり忘れていたことに動揺してロビンを見る。

「あーーーーー！！」

ロビンを見た麦わらの一味は皆驚いた表情をしている。

「組織のあだ討ちか！？相手になるぞ！！」

ゾロがそう言って刀を構える。

「なんでアンタがここにいるのよ؟؟」

「敵襲〜敵襲〜」

「あーーーーー！！」

ナミもウソップもチョッパーも動揺していた。

「だれ？」

どうやらチョッパーは雰囲気で騒いでいたようだ……。

「誰だつて良いさ、綺麗なお姉さまだあ」

サンジ……今日はラッキーだな。

「誰なの？」

マーガレットは完璧に初対面だからな……。

「ミス・オールサンデー!?」

あ、ビビがいるのに大丈夫なのかな？

俺はそんなことを思いながら、みんなのそれぞれの反応を楽しんでいた。

ロビンが「この船に置いて？」と言ったことがすべての始まりだった。

それをルフィが即了承したことでロビンが仲間になることになったのだが……。

どうやらビビがいてもいなくてもルフィは変わらないようだ。

良かった。

それから少し経つと、ウソップがロビンに事情聴取のようなことを始めた。

しかしウソップがロビンに「何が得意だ？」と言ったところでまた騒がしくなる。

まあいきなり「暗殺」とか言われたら俺だってびびっちゃうけど……原作の知識があって良かった。

ダンッ!!

「まったく！軽くあしらわれちゃって情けない」

そう言いながら船に蹴りを入れたのはナミだ。

ルフィやチョッパーがロビンに遊ばれてるのが気に入らないらしい。

俺もナミに「ロビンは良い奴だぞ?」と、ルフィを肯定したことに怒っているのだろうか?

だったら怖いな……………。

マーガレットも「シンがそう言うなら信じられるかな」と言っていた。

ナミと一緒にビビもいる。
そりゃ〜ビビは嫌だろうな。

しかしそんなナミも、ロビンがクロコダイルの宝石を出したことでころっとロビンに寝返った。

「ナミさん!?!」

まさかの行動にがっかりするビビ。

いや、ナミはそういうやつだよビビ。
そろそろ慣れよう!

俺は心の中でビビを応援する。

サンジはいつも通りなのでもう何も言えないだろう。

結局ウソップもロビンに寝返り、反対派はゾロとビビだけになっていた。

甲板に二人でいたビビとゾロ。
そこにロビンが足を運ぶ。

「いいわねえ、この船は、いつもこんなに賑やか？」

「ああ、大体こんなもんだ」

ロビンの言葉にゾロが返す。

ビビはロビンを睨んでるようだ。

「ビビー！」

そんなビビに俺が話しかける。

「何かあったら俺が守ってやるからさ！心配すんな！」

俺がそう言つとビビの顔が笑顔になった。

そんな俺の後ろで睨んでるのが二人ほど……………。

ナミ……………さっきまで宝石見てなかったか？

マーガレット……………死なないからといっても弓矢はダメだろう……………。

俺はこの先どうなるのか心配になった。

「フッフ……………アナタも大変ね」

いや、アンタのせいだよロビン……………。

「ん？雨？」

突然そんなことを言うサンジ。

「いや、雨じゃねえな．．．何か．．．」

「あれか？？」

「『『『『『！！！！？』』』』』」

空島に行くためのイベント。

俺はわかっていただけ．．．．．。

直に見るとこんなに不思議で恐ろしいものなのか！？

空から降ってきたのは巨大なガレオン船だった。

世界に届く吉報！生きていた船長？（後書き）

今回は後書きを書きませんでした。

書こうと思ったんだけど、前回の話には無いほうが良いかなって思
いまして……。

仲間にビビやマーガレットを加えての空島編はしっかり書きたいな
。

本当は一日二章ぐらい更新したいんだけど…………。
頑張ります！！笑

力を求めて挑むシン？

「

ああ．．．寝てたのか。

まだ覚醒しない頭を無理矢理覚醒させようとする。

「シーーーン！！」

ん？

誰か呼んでるな。

俺は体を起こして声が聞こえた場所に行く。

今日も快晴だな！

眩しい太陽が寝起きの目を刺激させる。
海から吹く潮風が気持ち良い。

「やっと起きたか！」

そう言いながら腰に手をあてる女の子。

もうそろそろジャヤに着く。空島に行くには必要なサウスバードを捕まえに行くついでに食料も補給しないとな・・・。

「進路は大丈夫か？」

俺は優しくそう言う。

別に心配はしていないが、何か話さないと！と思って口にした。

「もちろんだ！」

嬉しそうに言う彼女に、俺は満足して甲板の方に行く。
この船は今日も騒がしい。

「シン！もうすぐ空島に行けるんだよね？」

マーガレットがはしゃいでいるのがわかる。

アマゾン・リリーから出たことのない彼女にとっては、全てが新鮮で楽しいものなのだろう。

ま、空島はマーガレットじゃなくても信じられないくらい存在か
．．．

まだここは新世界じゃないしな．．．．。

私は本当にシンと一緒にいることができて幸せだ。

初めて蛇姫様に認められて九蛇の戦士として船に乗ることを許可された時、すごく嬉しかった。

でも、その最初の航海で敵船との交戦中に大ケガしてしまった私は船に戻れずにいた。

そこに現れて私を救ってくれたのがシンだ。

私はこのことを絶対に忘れない。

蛇姫様と同じくらい．．．いや、それ以上にシンのことを．．．

大切に思う。

」

「お前は行くなあああああああ!!」

ん？

あれ．．．いつの間に寝てたんだっけ？

「気がついた？」

俺が目を開けるとそこにはマーガレットの顔が．．．って!!

「うおっ!!」

俺はマーガレットの太ももに頭を置いて寝ていたようで、いきなり
のことで俺は飛び上がった。しまった。

「なんかあの時を思い出すなあ」

あの時??

「もしかして俺が記憶を無くす前の？」

俺がそう聞くとマーガレットは「うん！」と言った。

「そついえばここは？ルフィたちもいないけど……」

ルフィやゾロの姿が見当たらない。

ナミもいないな……。

「ルフィさんたちなら空島の情報収集に行ったわよ」

あゝビビ。

「……そつか。って空島??」

俺がそう聞くとビビは今までであったことを説明してくれた。
ガレオン船が落ちてきてから、サルベージしたりなんたりで今に至

るそうだ。

そつえばそうだった。

ルフィたちがサルベージしに行ったから、俺は暇で昼寝したんだっ
た。

「おーシン！起きたのか！！」

ウソップがそう言いながら近付いてきた。

その後ろにサンジもいるのだが、何やら怒っている様子だ。

「シンが寝てから大変だったんだぞ！！」

「なんかあったのかチョッパー？」

「みんなでシンを……」

「ちょ、ちょっとトニーくん！？」

「あらあら、大変ね」

ん．．．何がなんやら．．．。

「てかシンにお願いがあるんだが．．．」

いつの間にか船を降りているウソップ。

どうやら俺が寝ている間に船が破損したようで、それを直してほしい。

「．．．めんどくさい」

俺は一言そう言う。

「いやいや！お前の大嘘憑きでパパッと直せるんだろ？」
オールフイクション

やっぱりこう言うてくるか．．．。

「大嘘憑きは船を直すわけじゃない。
オールフイクション
その傷や破損を無かったことにするんだぞ？本当にいいのか？」

俺は真剣な目でウソップを見る。

「それってどういう．．．」

「なんとなくだけどさ。無かったことにしたら、これまでの冒険も無かったことになるようで．．．俺は嫌だな」

「．．．．．」

これは俺のわがままなのはわかっている。

けどウソップは何も言わずにチョッパーと船を直し始めた。

そこへ傷だらけのルフィたちが帰ってくる。

おそらくベラミーにやられたのだろう。

「マーガレット、ちょっと一緒に来てくれ！」

「??？」

ルフィたちはモンブラン・クリケットに会いに行くようだ。

しかし俺とマーガレットはルフィたちと別行動することにし、後で合流するということでした承を得た。

今のままじゃ空島で何もできない……。

俺は新しい力を手に入れるためにベラミーに挑みに行くことにしたのだ。

マーガレットについて来てもらうのは、まあ保険ってことだな。

「じゃあ、また後で！」

「おう！俺たちは先に行ってるからな！！」

力を求めて挑むシン？（後書き）

短い．．．泣

明日は頑張ります！

良かったら感想などいただけると嬉しいです

やる気をください！！笑

練習

「あの技……シンが使ってたのと似てたね？」

俺は今、マーガレットと一緒にルフィたちのところに向かっている。

ルフィたちと別行動した俺たちは、新しい力を手に入れようとベラミーの所に行った。

ベラミーはルフィたちの仇討ちと考えていたのか、かなり油断していた。

俺の懸賞金が2700万だと思っていたのだろう。

俺が「2億8000万」だと言うと、全員が俺の顔を見て笑い出したのだ。

なんとなく……。

なんとなくわかっていたことだが、俺はその態度に頭にきて全員に邪眼をかけてボコボコに……「はい、おしまい」で帰ってきた。

もちろん神様から力も貰った。

しかしマーガレットも、俺がバカにされたことに怒ってしまってサーキースをボコボコに……。

結局ベラミー分の一つの能力しか貰えず、俺は少し残念な気持ちで歩いている。

マーガレットが言ったベラミーと似ている技というのは、おそらく記憶消去前の俺が使っていた技なのだろう。

しかしベラミーを倒したことで、マーガレットの言っていた技を神様から貰えた時に、俺が前思っていた予想が確信に変わった。

記憶を無くす前と同じ力を与えられている？

世界に数ある漫画やアニメ、ゲームでの能力をルーレットで決めているのに同じ能力になるのは明らかに故意だと言わざるを得ない。

ま、俺が考えても仕方ないことなのかもしれないが……。

それにしても……能力を貰ってもまったく使いこなせる気がしない。

体は普通の人間だから当たり前ではあるが、使える能力、身体的向上能力ほど扱いに難しいのが困る。

練習しようにも、今後もほとんどが海の上だし、陸にいる時にはなんらかの事件に巻き込まれているのが麦わらの一味だ。

そう思った俺は足を止めた。

「マーガレット!」

「なに?」

「先に帰っててくれ！夜には戻る！」

少し不審に思ったマーガレットだが、「わかった」と言っとみんなの所に帰っていった。

さてと……とりあえず人気のない、広い場所を探すか！

「シンはまだこねえのか？」

ルフィが待ちきれないという感じでイライラしている。

あれからもう夜があけて、空島に出港する準備も終えている。
あとはシンが帰ってくるのを待つだけだが……。

「お？」

サンジが何かに気付いた。

遠くの方で、特に急ぎもせずにくつくりと歩いてくるシンの姿があった。

「シン急げ！出港時間過ぎてるぞ！」

え？そうなの？？

じゃーちょっとお披露目しようか！

シュンッ！！

「え！？」

「やあ」

みんなの視界から消えたシンが、いつの間にかみんなの輪に入っていた。

「おーーーーー!!今のどうやったんだシン!？」

ルフィがシンを見て興奮している。

しかし……………。

「シンも来たことだし、早く出港するわよ!」

そう言って船に乗るメンバーたち。

ルフィと同じように興奮してくれたのはウソップとチョッパーだけだった。

なんか……………淋しいな。

どうやら、みんなから見た俺はもう何でも有りの超人らしい。

まあ、オールフィクション大嘘憑きとか千本桜を見たら、ただ消えただけじゃ驚かないよね……………。

消えたわけじゃないんだけどなあ。・・・。

黒瀬新一。21歳。

身長 172 cm

体重 55 kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。
顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。ただ、心の中ではウソツプバリのビビリ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。

誰にも気付かれないほどのポーカーフェイスが出来る。

最初に神様から与えられた能力は【大嘘憑き（オールフィクション）】、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

麦わらの一味での役割は【副船長】。

記憶を無かったことにしているという過去が明らかになり、ジョーカー海賊団の船長だった経歴がある。

その一味の仲間。

マーガレット。狙撃手。

懸賞金は現在不明。

【大嘘憑き（オールフィクション）】

すべて なかつたこと
現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかつたこと」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかつたこと」にできる（因果律に関与するスキ

ルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。

神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることによって桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまうため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『くもさくら』）」。卍解時にも唱えることがある。

神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。24時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限があり（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。

アローン一味の幹部のハチを倒したことで神様から貰った四つ目の力。

ブルースフラッシュ
現在は海跳ねという海の上を連続で跳ねながら移動するというオリジナル技として使用している。

【どんな物・場所でもあらゆるアングルから資料なしで描けるスキル】

漫画『バクマン。』に登場する中井巧朗なかいたくろうの漫画を描くためのスキル。アローン一味の幹部のクロオビを倒したことで神様から貰った五つ目の力。

【ハーレム体質】

漫画『TO LOVEる』に登場する結城 梨斗ゆづきりとが持つ魅力がスキルとなつてシンに与えられた。

アローン一味の幹部のチュウを倒したことで神様から貰った六つ目の力。

【天性の歌声】

漫画『BECK』に登場する田中幸雄たなかゆきおの世界の著名なミュージシャンも一聴でうならせる才能をスキル化して神様から与えられた。

アーロンを倒したことで神様から貰った七つ目の力。

【縮地】

漫画『るろうに剣心 - 明治剣客浪漫譚 -』に登場する瀬田宗次郎がこの名前の移動法を使用。

初速から一気に最高速に達し、一瞬で相手の間合いを侵略することができる移動術。目にも写らないぬ速さである。室内の戦闘であれば、天井も使用した三方向攻撃を展開できる。

ベラミーを倒したことで神様から貰った八つ目の力。

練習（後書き）

今回も本文が短くなってしまいました。

プロフィールが入ってしまったので仕方ないですが・・・いらないですか？笑

神の国スカイピア？シン、怒りの正解！

ジャヤから出港して3時間が経った。

辺りは不気味なほどに静かで、今にも何かが起きそうな雰囲気だ。

「マーガレットは2回目なんだよな？」

「うん！でもシンも2回目なんだけどね・・・」

「結局覚えてないからなあ」

そんな他愛のない話をしながらも俺はワクワクしている。

「来るぞ！！突き上げる海流が！」
ノックアップストリーム

「待てーーーー！！！」

今まさに海流が浮き上がろうとした時、そんな大声を上げて来た男たちがいた。

「道化師シンイチ！てめえの2億8000万の首をもらいに来た！」

あれは．．．．黒髭！

でも今は来たって意味ないぜ！

俺はそんなことを考えながら黒髭海賊団を見ている。

「ゼハハハ！そして麦わらのルフィ、1億！海賊狩りのゾロの6000万の首も貰う！」

「あいつはさっきの！おれが船長なのにー！！」

ルフィ．．．怒るとこそこじゃないから．．．。

「しょうがないでしょ！？シンのほうが懸賞金は上なんだから！」

「ナミさん．．．．ルフィさんがかわいそうよ」

いや、ビビ．．．それはそれで傷つくんじゃない？

「みんな！海流が来るよ！船にしがみついて！！」

マーガレットの突然の言葉にみんなは言われた通りにする。

直後、ノックアップストリーム 轟音とともに突き上げる海流が空に向かって突き上げる。

これは．．．マジでやべえ！！

少しでも力を抜いたら船から落ちそうだ。

黒髭がどうなったのかは確認できなかったが、おそらく原作と同じようなことになっているだろう。

「帆張つて！！」

ナミの指示で全員が動き出す。

そしてそのままゴーイングメリー号は雲の中へと姿を消した。

「はあ．．．はあ．．．」

すげえ．．．。

まさか本当に雲の上に乗ることができるなんて．．．。

俺はその光景に目を奪われた。

「第一のコース！キャプテン・ウソップ泳ぎまーす！！」

「あ！やめとけウソップ！！」

俺の声も虚しく、ウソップは雲の海に飛び込んでしまった。

「ルフィ！！早くウソップを引き上げろ！！」

「なんで？」

「雲には海底はないだろ？」

「……………ないな」

……………。

「ウソップ!!」

そう叫んだ後、ルフィとロビンの力でウソップを引き上げた。

まったく!

まあ、俺も原作読んでなかったら飛び込んでたかもしれないが……。

「人だ! 誰が来る、く、雲の上を走ってるぞ!?!」

今度は何だ!?!?

展開が速すぎてついていけないんですけど!

「排除する！」

あー。

ワイパーか！

ルフィ、ゾロ、サンジが立ち向かうが、あっさりとやられてしまう。

ガンッ！！

痛って・・・。

何故か俺を蹴り飛ばしたワイパー。

何で次が俺なんだよ！！

「そこまでだ！！」

「！？」

どこからか来た男が鳥に乗って現れ、さきほどの仮面をつけた奴を吹き飛ばす。

おー、空の騎士ガンフォール！！

「我輩、空の騎士」

うん。知ってるけど・・・。

俺は心の中でツッコむ。

「何よアンタたち、だらしない！」

すいません。

「でもなんか空気が薄くて・・・」

俺はナミにそう言い訳をする。

「お主ら青海人か？」

「ええ」

「ならば仕方ない。

ここは青海より7000メートル上空。通常の青海人ならば体が持つまい……………」

フローアーありがとよ、おっさん！

あー眠くなってきたなあ。

なんかガンフォールがナミたちにいろいろ説明し始めたけど、俺は別に聞かなくてもいいか。

俺はそう考えて船の中に入った。

あ、ビビとカルー。

「あら、シンさん。外が騒がしいようだけど」

「ん？ああ、気にすんな！それよりここにいたのか」

「ええ。船が飛んだ時、カルーが落ちちゃいそうだったから」

「そっか。もう大丈夫だから外に出てみたら？」

「そうね・・・雲の上がどんなところなのか見てみたいわ」

そう言っ**て**ビビは、カルーと一緒に外に出て行った。

さてと・・・少し寝るか！

z
z
z
・・・。

おっ！！

なんかすげー寝たような・・・。

キンッ！！

ドガッ！！

ん？

なんか外が騒がしいな・・・。

シンが船の外に出てみると、船のマストがなくなっていた。

「チョッパー！！？」

船の片隅で泣いてるチョッパーを見つけた俺はすぐに声をかけた。

「シン！！・・・おで・・・船守れなかった・・・」

体中傷だらけになりながら船を守っていたようで、あちこちから血が流れている。

今は空の騎士ガンフォールが敵と戦っているようだが・・・。

「なんでこんなになるまで俺を呼ばなかったんだ!？」

「だって・・・みんなが・・・寝がせてあげなざいで・・・」

・・・バカヤロウ。

「チョッパ、良くやった!お前は誰よりも男だよ!」

「・・・う・・・うおおおおおおお!!」

「あとは俺に任せろ!」

そう言って俺は千本桜を抜いた。

「空の騎士!あとは俺がやる!」

「お主は．．．」

ガンフォールは俺を見ると船に着地した。

「また侵入者が増えたな」

シュラか．．．．。

空中戦じゃ勝てないな。

「卍．．解！散れ、千本桜景厳せんほんざくらかげよし」

俺はしょっぱなから卍解をした。

「なんだこりゃあ!？」

「驚いている暇はないぜ!」

そう言った瞬間に千本桜の刃をシュラを囲むように配置させた。

「骨も残らんと思え」

ザシュツ！

億の刃がシュラを襲う。

逃げ場の無いシュラはそのまま千本桜の刃によって斬り刻まれた。

「強い．．．．神官を一瞬で．．．」

ガンフォールがその光景を見て呟いた。

「．．．．チョッパー」

俺はその言葉を見殺してチョッパーに近付いた。

「シン、すげえな〜！！」

目を輝かせて寄ってきたチョッパーに優しく微笑む。

「オールフイクション
大嘘憑き」

俺がそう言つと、チョッパの体の傷が消えていった。

「これで良し！チョッパの傷を無かつたことにした！」

「おお！！シンは医者になれるな！」

「チョッパには勝てないさ。オールフイクション大嘘憑きじゃ、心の傷は無かつたことには出来ない……。それって医者にとって一番大事なことだろ？」

「えっへっへ。俺も頑張るぞ、シン！」

嬉しそうにしちやつて……。

「チョッパー！いるの？」

どうやらナミたちが帰ってきたようだ。

「おかえり、みんな」

「あら、シン起きてたのね」

あはは・・・。

それからすぐにルフィたちも帰ってきて、麦わらの一味が全員集合した。

マーガレットはナミたちと、ビビはルフィたちと一緒に行動していたようだ。

ドゥルルン！

え？

今??？

まあ、シユラを倒したけどさ・・・。

いつもは誰もいない時に神様が現れていたので驚いた。

「やあ！」

「やあ！つじやないよ！！目の前にルフイたちがいるんだけど・・・」

「気にしない気にしない」

いつもながらノリが軽いな・・・。

「そういえば聞きたかったんだけどさ、なんか同じ力を貰ってるんじゃないかって思ってるんだけど・・・記憶を無くす前と・・・」

「シン!？」

ん？

「何ボーっとしてんのよ」

ああ、神様のところに行ってる時はボーっとしてるのか？

俺、どんな顔してたんだろ・・・。

俺が神様の所で力を貰っている間に、みんなはいろいろと報告をしていたようで、これからのことも話していた。

ルフィは・・・あ、なんかキャンプファイヤーしてる。

それからはルフィいわく黄金前夜祭という名の宴で朝まで盛り上がった。

「さて、行くかー!!」

朝になり、俺たち麦わらの一味は二手に分かれて行動することにした。

探索組はルフィ、ゾロ、チョッパー、ロビン、シン、マーガレット。

脱出組はサンジ、ナミ、ウソップ、ビビ&カルー、ガンフォール&ピエール。

神の国スカイピア？シン、怒りの正解！（後書き）

前はちょーーーーー短かったので、今回はかなり長めになりました。

毎回この長さで書きたいです。

みなさんはどうですか？

このくらい長い方が良いでしょう？

感想くれたら嬉しいです！

神・エネルギー登場！始まった生き残り合戦開始

俺たち麦わらの一味は2組に分かれて行動を開始したのだが……。

「おいゾロ！どこ行くんだ！？そっちは逆だ！西はこっちだぞ！まったく……お前の方向音痴にはホトホト呆れるな」

「西……そっちは東だぞ？」

ルフィがゾロが行こうとしている道を見てそう指摘するが、チョッパーが言っているようにルフィが指しているのは東だった。

「シン、本当にルフィたちは大丈夫なの？」

マーガレット、それは言ってるな……。

「おйлフィ．．．。お前はなんでそう人の話を聞いてないんだ。ドクロの右目なんだから右だろうが！バカかてめえ！！」

「．．．どっちもどっちだ」

ゾロはまだ気付いてないようだ。

チョッパはこのメンバーだと完全にツッコミだな。

「チョッパ、俺たちが向かってるのは南で方向はこっちだと伝えてくれ！」

俺はそうチョッパに言って、南を指差す。

「良しきた！」

「なんだあゝ南かゝ。それを早く言えよあゝ」

ルフィは何やら良い雰囲気のパックを持ちながらそう言った。

「.....」

ロビン！

無表情でルフィを見ない！！

そんなやり取りもありながら俺たちは歩いていく。

「なんだあ？あの変な模様のでつけえ根っこは？」

突然ルフィが後ろを振り返って言う。

「どうしたの？」

「蛇じゃねえの？」

俺はスラッと言った。

「ぎゃあああああああ!!」

チョッパービビリすぎ……………ってデカ————!!

俺たちの目の前に現れたのはマーガレットが連れている蛇の何倍もある巨大な蛇だった。

「逃げる————!!ウワバミだああああ!!」

ルフィがそう言つと、俺たちは一斉に走り出した。

「何で走ってるの?あんな蛇倒せばいいんじゃない?」

「マーガレットはまだルフィのことをわかってないな!」

「?」

「これはな……………ノリというやつだ!」

「え？そっなの？」

「そっだ！」

たぶんね・・・。

「だからマーガレットも攻撃せずに走り続ける！」

「わ、わかった！」

「ぎゃあああああああ！！！」

「おお！チョッパーは凄いな！あれがノリというやつか」

「う、うん。マーガレットもあれぐらい必死に逃げれば良いんだ！」

「困ったわ．．．．コースに戻っても誰もこない。私のはぐれちゃったのかしら？先に行って待つほうがいいかしら？」

「やべえ！！はぐれた！？あれ？た、助け．．．．みんなどこだ
あああああ！？」

「んあ？あいつらどこだ？ちょっと目を離すとこれだ！まあいいか、あいつらはあいつらで何とかやるだろう。俺もだいたい地図は頭に入ってる。右だな！」

「ふいゝやれやれ、まったくあいつら迷子か？しょうがねえな！先行って遺跡で待つか！真っ直ぐ南だから、南なら暖かそうな方だな！」

「シンとはぐれちゃったなあ．．．。確か遺跡は南だったわけ？早く行かなきゃ！私だけはぐれたなんて迷惑になるもんね！」

「あゝ、やっぱりこうなるのか．．．。とりあえずルフィとゾロは遺跡にたどり着けないとして、マーガレットがいないとエネルとやり合えないからなあゝ。まずはマーガレットを探すか！」

「シャンディアが動き始めたようだなあゝ。
ほほう．．．。青海人も2手に分かれたか．．．。さらに別行動、
単独でか。」

今日は賑やかな一日になりそうだぞあゝ。はたして何人が生き残れ

るやら。さて、サバイバルゲームの開始だ！ヤハハハハハハ！」

サバイバル開始。

神・エネル登場！始まった生き残り合戦開始（後書き）

家政婦のミタを見てたら全然進まなかったという・・・。。笑

次回はシュラを倒したシンの九つ目の力を解禁します！

神との戦い！共犯者はマーガレット！？

「ヤハハハハ、さーて．．．こちらの勢力が神兵50の、神官2、私を含め53。今島に向かっているシャンディアが20人。青海人が、森へ入ったのが6人に脱出班が5人。占めて84人！これで、生き残り合戦というわけだ。

ヤハハハハ、今より3時間後、これが一体何人に減るか当てようか
！」

「まったく、すぐにそういうゲームになさる」

「いいじゃないか。おいお前、当ててみる」

そう言つてエネルは後ろにいた女性に聞いた。

「ええ！？私ですか？い、いえ、私はそういうことはまったくわか

りませんので．．．．．」

「なんだお前、ノリが悪いなあ。勘でいいんだよ勘で！」

じゃーお前だ！当ててみる！」

今度は近くにいた男に聞く。

「ま、まあ、神官2名もさることながら．．．．．
．50人ということだ」

「ヤハハハハハハ、なるほどなあ、50人か。お前、空の戦いを甘く見ておるなあ」

「では、神はどのような考えで？」

「そうだなあ．．．．．3時間後、この島に立っていられるのは8人中．．．．．5人だ！」

「さてと．．．とりあえず遺跡はどっちなんだろうな？」

ルフィたちとバラバラになり、南と言われてもよくわからないシンは、適当に森の中を歩いていた。

「発見だメー！！」

「！？」

突然現れた神兵。

アックススタイル

一度斬撃貝を喰らってしまったが、すぐに立ち上がって千本桜で斬り刻んだ。

俺もかなり強くなった。

不意打ちには対処できないが、それは大嘘憑オールフィクションきでなんとかなる。

新しい力も何個か手に入れたし、モブキャラ程度なら簡単に倒せるようになった。

試してみたい……。

「縮地！」

そう呟いてシンはその場から消えた。

それからシンは、縮地でこの島を走りまわった。

そしてたどり着いた場所は．．．．。

「なにやら走りまわっていたようだが．．．まさか我の所に来るとはな」

「自分の力がどれほどのものなのか知りたくてね．．．」

「よかるう。ただの人間が神に挑むということがどれほど愚かなことなのか教えてやる！」

こうして、シンVSエネルの戦闘が始まった。

「なんだそれは．．．？」

エネルがシンを見てそう言う。

「これは、千本桜景厳せんぼんざくらかげよしといって、億を超える刃だ」

「・・・そうか」

「そうだ！」

その言葉を交わした両者は、その瞬間に消えた。

「ほほう。人間にしては速いな」

「お前も人間だろ？」

「我は神なり」

やはり・・・と言つべきか、シンはエネルギーに攻撃を当てること
が出来ない。

しかし、エネルギーもシンを倒すことが出来ない。

攻撃が当たるのに、まるで何もなかったかのように立ち上がるシンに対して疑問を感じるエネルギー。

この戦いに終わりはあるのか？

どちらもそう感じている。

そのことをシンは知っていた。

エネルギーに勝つことはないのだと、しかし負けることもない。

だからこそ、シンはエネルギーに挑みに来た。

強くなるために……。

1時間にも及ぶ戦いは突然終わりを向かえた。

「もついい」

そのシンの一言があったからである。

「逃がすと思うか？」

確かに今のままではエネルギーから逃げることなど不可能だった。

縮地の速さはエネルギーの雷の速さに比べると止まって見えるだろう。

「悪いが、まだサバイバルは始まったばかりなんadena」

「!?!?」

その言葉を残してシンは消えた。

もちろん、縮地で素早く逃げたわけではない。

言葉通りに消えたのだ。

「はあ．．．．．はあ．．．．．」

そしてシンはまた森の中にいた。

縮地を使うと10秒が限界だな．．．．。

いや、充分か？

まずわかったことは、今の俺では自然系ロキアに攻撃を当てられないこと。

そして九つ目の能力は覇気マントラ（心綱）では感知されないこと。

エネルギーが倒すだろうが、マーガレットとのコンビネーションも試しておきたいからな．．．。

マーガレットを見つけ次第、またエネルギーと戦う！

覇気使いがいれば、俺も戦える！

次はしっかりと見せてやるぜ！

九つ目の能力、神パーフェクトプランの不在証明をマーガレットとのコンビプレイかみのき神のよじはんしゃ

共犯者でエネルギーを出し抜く！

パーフェクトプラン
神の不在証明。

自身が呼吸を止めている間は、誰にも自分の存在を気付かれなくなる能力。

発動時間は発動者が呼吸を止めていられる間であるため一定ではない。

簡単に言えば「複数でレストランに行っても一人だけ水を出してもられないような奴の究極形」。

足音や匂いの一切が消えるのではなく、どれだけ足音を立てても匂いを漂わせても、周囲はそれに気づかなくなる。見聞色の覇気を使っても認識されないため、能力の効果が途切れるまで発見する術が無い。

逆に言うと、あくまで周囲が気づかないだけで存在自体が消えるわけではないため、流れ弾やあてずっぽうの攻撃にもダメージを受けてしまう。この能力を発動している状態で攻撃をしかけた場合、敵は「攻撃を受けたこと」は分かるが、発動者の存在が認識できないため、何も無い場所から攻撃を受けたようにしか感じられない。

ただし、血などの使用者が残っていた跡は他者にも視認が可能な

のでそこから居場所を特定することは可能である。

かみのきょうはんじや
神の共犯者。

パーフェクトプラン
「神の不在証明」発動中、発動者が手で触れている者にも「神の
エクトプラン
不在証明」の効果が連動する。
発動者とは違い、触れられている者が呼吸を止めている必要は無い
（そのため声を発することも可能だが、他人には聞こえない）。

かみのきょうはんじや パーフェクトプラン
神の共犯者は神の不在証明の能力に含まれるため、この二つの能力
で一つの力とされる。

神との戦い！共犯者はマーガレット！？（後書き）

更新が遅くなってすみません・・・。

気合を入れなおして、今後も頑張ります！！

マーガレットの奇行？シンに向けられた殺意の矢！

「・・・ひどいことするわ」

ロビンが神兵の一人を倒してそう呟いた。

「ロビン！？」

そこへ現れたのはシン。

「あら、無事だったようね」

俺は「まあね」と言っつてロビンに近付いた。

それからロビンと一緒に遺跡を探索してまわる。

ロビンもみんながどうしてるのか知らないらしい。

マーガレットやビビは原作でこの場にいなかったなので心配である。

いや、もう原作のことを考えるのよそう．．．．。

すでに原作とは違う物語になっているのだ。

もしかしたら、ルフィがエネルギー勝つということも変わってしまうかもしれない。

だから俺は．．．．俺の出来ることをしよう！

シンはそう考えることにした。

「おや、あなた達は何をしてるのかしら？」

「お前は？」

「私は、神兵長ヤマ。侵入者は排除させていただきます」

「どうするロビン？」

俺は笑いながらロビンの方を向いた。

「私がやるわ！」

「ずいぶんやる気だな」

「遺跡を破壊する人は許せないの！」

「なるほどね」

そこから、ロビンとヤマの戦闘が始まった。

ヤマは「私相手にアナター一人で大丈夫かしら？」などと言っていたが、まあ、ロビンなら大丈夫だと思う。

危なくなったら助ければ良いしな。
なによりロビンのやる気を奪いたくなかった。

「大丈夫？」

戦闘を終えたロビンに俺は声をかける。

少し苦戦していたようだが、ロビンはヤマに勝利した。

そんなロビンに、俺は大嘘憑オールフイクションきで傷を無かったことにしてあげた。

「便利な能力ね」

そう言っ
て俺を見たロビンは、すぐに「ありがとっ」と言った。

その後は特に敵にも会うこともなく、俺とロビンは森の中を進んでいく。

「ここっ
てもしかして……」

「ええ、ここが黄金都市シャンドラよ」

ロビンはそれを見つけると、すぐに遺跡を調べ始めた。

（こっ
つ見ると、ロビンも子どもみたいだな）

遺跡に夢中のロビンを見て、俺はそんなことを考えていた。

ドオオオオオオオオオオンッ！！

バリバリバリーーッ！

な．．．．．！？

ロビンを見ていた俺は、背後にいたエネルギーに気がつかなかった。
それによりエネルギーの攻撃が直撃してしまったのだが、シンに大した
ダメージはなかった。

が、それがシンにとっては最悪な結果になってしまった。

「副船長さんっ！？」

倒れたシンに駆け寄るロビン。

「ヤハハハハ！思った通りだ！！」

そう笑いながら現れたエネルは、駆け寄ったロビンの前に降り立った。

エネルがやったこと、それはシンを気絶させることだった。

先の戦いでいくら攻撃をしても死なないシンに疑問を持ったエネルは、殺さないという選択をしてシンに攻撃したのだ。

それは見事に成功して、シンは意識を失ってしまった。

バリバリバリーー！！

さらにエネルはロビンにも攻撃し、ロビンもその場に倒れてしまう。

「シン！！」

そこに登場したのはマーガレットだった。

マーガレットはすぐに弓矢でエネルを狙うが、簡単に避けられてしまっ。

「私の予想では、3時間後5人生き残るはずだった」

「!?!」

マーガレットの矢をかわしたエネルがそんなことを言い出した。

「だが、今この場には6人いる・・・神の私が予言を外すわけにはいかん!」

エネルが喋っている時に、マーガレットは自身の後ろを振り返る。するとそこにはゾロ、ナミ、ガンフォール、ワイパーの4人がいた。

「ナミ!ゾロ!」

マーガレットは2人に近寄った。

「シンは大丈夫なの!？」

ナミがそう言う。

「シンはたぶん気絶してるだけだと思う」

もちろんロビンのことも心配しているのだろうが、ナミはマーガレットにそう聞いた。

「残り3分、神が予言を外すわけにはいかん。そちらで消しあうか？それとも私が手を下すか？」

なにやら勝手にそんなことを言っている奴がいる。

そう思ったマーガレットはその言葉を見殺してシンに近付き、シンに向けて弓を構えた。

「ちょ、ちょっとマーガレット!?!何してんのよ!?!」

マーガレットの行動を見て、ナミがマーガレットを止めようとする。

「我を無視するとは．．．愚かな！」

そう言ってマーガレットに手を向けるエネル。

「させるかっ！！」

「^{ヴァーリー}放電！！」

バリバリバリ！！！

「ぐわああああああ！！」

「ゾロ！！」

マーガレットを庇おうとしてエネルの攻撃を喰らってしまったゾロ。

「ヤハハハ、これで5人。お前達は限りない大地に連れて行ってやるう！」

「嫌よ！」

ナミがエネルに反抗して言う。

「そうか……ならば死ね」

ドッ！

「なんのつもりだ？」

「海楼石って知ってるか？それが俺のシューターに仕込んである。」

ナミに攻撃しようとしたエネルギーに対して、ワイパーがエネルギーにのしかかる。

「なるほど．．．力が入らん」

「くたばれ！^{リジェクト}排撃！！」

そのワイパーの攻撃とともに口から血を吐き出し、意識を失うエネルギー。

ドクンッ！

「惜しかったな．．．戦士ワイパー。海楼石とは．．．3000万雷鳥！！！」

そう言ってワイパーに攻撃したエネルギーは、そのままガンフォールにも攻撃して2人とも倒した。

「あとはお前たち2人だけだ・・・」

ナミとマーガレットに手を向けるエネルギー。

ザクッ!!!

そんな音が聞こえたと思って、ナミとエネルギーがマーガレットを見ると、倒れているシンの胸にマーガレットが打ったであろう矢が突き刺さっていた。

「雷獣!!!!」

「きゃあああああああ!!」

「マーガレット!!」

マーガレットもエネルの前に倒れ、残ったのはナミとエネルだけになった。

「お前はどつするのだ?」

「……ついて行くわ……あなたに……」

「ヤハハハハハ! そうか!! ならば連れて行ってやる」

そしてナミはエネルとともにこの場を去った。

(……大丈夫。みんながきつと助けてくれる)

マーガレットの奇行？シンに向けられた殺意の矢！（後書き）

すべらない話おもしろいです

みなさんは見てますかー？

あ、これを見てるか！！笑

ありがとうございます

黄金の金の音色？はねる、2つ目の使い道！

「ん．．．．．」

「大丈夫か？」

「．．．．シン」

目が覚めたマーガレットは起き上がる。

体も正常で、エネルギーにやられた傷もないところを見るとシンがやってくれたんだろう。

「エネルギーは？」

「上だ」

シンにそう言われて空を見上げると、船のようなものが浮いているのがわかった。

そして、そのさらに上には黒い球体の謎の物体。

「あれは．．．．．？」

「俺も今起きたところだが、おそらくエネルギーがやっただろう」

シンは何か確信があるような話し方をした。

「そういえば“コレ”．．．マーガレットがやっただろ？」

シンが持っていたのは、マーガレットがシンに向けて打った矢。

「ありがとう！おかげで早く目が覚めた」

シンがお礼を言ったのは、気絶しているだけなら何時目覚めるかもわからない状況より、一度死んで自動的に大嘘憑オルライクシオンきを発動させることによって、体の状態を無かったことにしたことのお礼だった。

「どうするの？」

「マーガレット、手伝ってくれるか？」

「もちろんだよ！」

「．．．．．これか、見事！！」

エネルは今、黄金の大鐘楼の前にいた。

（どうやらルフィとナミは下に落とされたようだな．．．．．）

「シン！いくよー！！」

コク。

マーガレットの言葉に頷くシン。

そして．．．．。

ヒュッ！

「！！！？」

グサッ！！

覇気を纏ったマーガレットの矢がエネルギーに突き刺さる。

しかし、エネルギーの咄嗟の判断で致命傷は避けたようだ。マーガレットの矢はエネルギーの肩に刺さっている。

(クソッ・・・失敗か・・・)

「なんだこの矢は・・・！我にあてるなど、何者だ！？」

(・・・も、もう・・・)

「ぶはあー！！」

シンは思いっきり息を吐くと、エネルの前にシンとマーガレットが現れた。

「ほう、そんなことも出来るのか」

「シン！？マーガレット！？」

空から落ちてきた二人にナミは言った。

「イタたた．．．．。ありがとうシン」

「ああ、それよりナミ、ルフィ！」

「何？」

「何だ？」

「準備は出来たか？」

「アンタ．．．．知ってたの？」

「それは後で！ルフィはエネルを倒しに行くんだろ？」

「おう！」

「じゃーあの黒いのは俺に任せろ！お前はエネルを倒すことだけ考えろ！」

マーガレットはみんなの所に」

「わかった！」

ドガァーン！！

「ジャイアントジャック巨大豆蔓が倒れるぞー」

「行くわよ、ルフィ！」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「さてと・・・」

ルフィとナミが巨大^{ジャイアント}豆蔓を登り始めたところで、シンは足に力をいれる。

スカイスプリング
「空跳ね」

ヒュンッ！

そしてシンは姿を消した。

これは『はねる』と『縮地』を使ったシンのオリジナルの複合技で、シンは『空跳ね』と名づけたようだ。

はねる瞬間に縮地を発動させることで、通常の何倍ものジャンプができるという力技だ。

バリッ．．．。

シンはその技で、エネルの雷迎らいごうの中に突入する。

しかし、ルフィと違ってシンは生身の体なので、数秒の間に何十回も死ぬことになった。

フッ．．．．。

だが、一瞬の隙を突いて雷迎らいごうを大嘘憑おーるふいクションきで無かったことにした。

「あとは任せたよ．．．ルフィ！」

雷迎らいごうを無かったことに（消した）したシンは、そのままみんなのいる場所まで落ちていった。

カラン．．．。

カラン．．．。

すげえ．．．良い音だ．．．。

「シン！！起きたの？」

目を開けたシンの目の前には、麦わらの一味がいた。

「ルフィは勝ったんだよね？」

ボーっとする頭でシンは聞いた。

「あたりまえでしょ!!」

「だよな・・・」

ナミがガッツポーズしながら応えたので、シンは安心してまた目を閉じた。

黄金の金の音色？はねる、2つ目の使い道！（後書き）

みなさん、イヴはどのように過ごしてますか？

一人で淋しい方も、カップルでラブラブな方も、家族で過ごしている方も、この小説を見て楽しませよー！！笑

もう見終わったか！

では、メリークリスマス！

ロビンのお礼！？空島よ、さようなら

「宴だあああああ！！」

ルフィの言葉で始まった宴は、敵も味方も関係なく騒ぐ。

「いつまで寝てるのシン！」

そう言って俺を起こしに来たのはナミだった。

「んあ？」

「アンタもゾロ並みに寝るわよね」

そうか？

俺はそう思いながら体を起こした。

「みんな楽しそうだ」

「シンさんも早く!!」

ビビが呼んでいるので、俺もみんなの輪に入って宴を楽しんだ。

それから3日間の宴が行われ、さすがに疲れたのか、4日目に起きている者はいなかった。

「おい!」

「なあに?」

「ナニ!みんなを起こせ!!」

「なんでよお？」

「黄金を奪うから．．．．．だろ？」

「シン！？起きてたのか？」

「まあね」

俺はこの展開を知っていたので、3日目の途中で仮眠をとっていたのだ。

案の定、ルフィがナミを起こしに来たのでその話に加わった。

それからすぐに全員が目を覚まして、これからのことを話し合う。

「じゃ、そういうわけだ」

会議が終わり、ルフィが言う。

「滅多に來れない空島だからなあ．．．みんな、思い残すことのないようにな！」

俺はそう言ってみんなの顔を見る。
何故かチヨッパーが尊敬の眼差しを向けていた。

「みんな遅いわね」

「まあ、蛇の中だからな」

「こっちは終わったよ！」

「クエーーーー！！」

俺とビビ、マーガレットとカルーは出港の準備のために船にいた。

「すごかったわね……空島」

ビビが思い返すように言う。

確かに、こんな凄い体験はこの世界にいても稀だ。

「おーい、お前らああああー！」

ビビとそんな話をしていると、みんなが帰ってきた。
ルフィたちの背中には大量の黄金が……。

すげえ……綺麗。

初めて見た。

初めて見た黄金にテンションが上がるシン。

黄金の分け前をみんなで話し合いながら、俺たちは空島を出港した。

「みなさん、あれが雲の果て……出口です」

コニスがそこまで案内してくれ、最後の挨拶を済ませると船は青海
に向けて落下しようとする。

「シン……………」

「ん？」

何故かみんなが俺を見ている。
わずかに涙目なのは、だいたい予想がつくが……………。

「私が死んだら、一番最初に生き返らせて！」

「はい？」

ナミが急に俺の手をとって言う。

「……………」
「あ。」
「……………」
「……………」
「……………」

そんなことをしていると、船は下に落ちていった。

「「「「「あああああああああー!」「」「」「」

ふわっ・・・。

「なにこれ!？」

「これはタコバルーンよ!」

ビビが見たものはタコで、船に巻きついているような感じが、不思議に思ったビビにマーガレットが教えてあげていた。

「マーガレット、知ってるの?？」

「一度空島に来たことがあるから」

「・・・この音・・・」

マーガレットがみんなから質問責めにあっていると、黄金の鐘の音を耳にした。

「いい音ね」

「空島ともお別れか……」

「クエーー」

「俺、また来たいなあ」

みんながそれぞれの思いを言う。

チュツ……。

「!!!」

みんなが鐘の音に聞き入っている中、突然ロビンが俺の頬にキスしてきた。

「傷を治してくれたお礼よ」

「???」

お礼ならすぐに言ってもらったけど……。

俺がロビンを見ると、もう何事も無かったように空を見上げていた。

ドォーーン!!

そして俺たちは青海へと帰ってきた。

が
・
・
・
・
。

そこは原作とは違う、しかし見たことがある場所だった。

ロビンのお礼！？空島よ、さようなら（後書き）

祝50万PVということで、次回からは原作とは違う話になります。
シン、ビビ、カルー、マーガレットを加えたらどうなるのか・・・。

アニメを見てる人はわかると思いますが・・・。

見てない方のために、できるだけ細かく描写したいと思いますので、
よろしく願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0864z/>

ONE PIECE 最強の転生者

2011年12月25日17時46分発行